
とある世界の“拒絶者” The denialer

キュー〜ブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある世界の“拒絶者”

The denier

【Nコード】

N3965V

【作者名】

キューブ

【あらすじ】

こう、思ったことはありませんか。自分の周りから人がいなくなったら、自分は一体何なってしまうのか、と。悲しむでしょうか、喚くでしょうか、狂ってしまうのでしょうか。どちらにせよ、耐えることなど出来ないでしょう。しかし彼は耐えたのでした。決して抜け出せない地獄に。そんな、強い心を持った彼は、子供を助けて死んだと思ったら突然当たり一面真っ黒の空間に。

「此処は……、一体何処だ？」 そんなお話。

タイトル変えました。元タイトル『たとえ報われなかつとも』

ブローグ

これは、一人の孤独な男の物語。
唯の一度も報われることのなかった、悲しい男の物語。

彼に、家族なんていなかった。友と呼べるものもいなかった。
理由は至極簡単。

『才能』だ。

彼には、才能がなかったのだ。

それは、勉学の才能、運動の才能、料理の才能、果ては人に好かれる才能。

挙げたらキリがない。

そう　それ故に家族には半ば捨てられるような状態になり、友なども当然でできなかった。

想像できるだろうか。周りには味方が誰一人として存在しないその光景を。

耐えられるだろうか。すべてのモノに拒絶されるそんな状況に。

だが、彼は耐えられたのだ。

皮肉にも、彼には『ソレ』に耐えうる精神力、忍耐力といったものを持ち合わせていたのだった。

だが、だからこそ彼は常に前を見続ける事ができたのだ。立ち止まらなかった。歩き続けた。

たとえ、報われない事だとわかりきっていても。

彼は、馬鹿みたいに努力をし続け、決して諦めなかったのだ。

これは、そんな一人の孤独な男の物語。

決して報われることのなかった……男の、物語である。

第一話 全テノ始まり。(前書き)

遅くなって申し訳ありません。
では、どうぞ。

第一話 全テノ始マリ。

その男、白石翔は走っていた。

恐らく、トレーニング中なのだろう。

彼の服装は、上下とも真っ黒で動きやすそうなジャージを着ており、足元には履き慣れているような運動靴という格好だった。靴の方は相当使い込まれているのか、様々な箇所に汚れが付いている。

土手からの帰りなのだろうか？

靴底には土や草などがこびり付いていた。

彼は百八十五センチメートルという比較的高い身長で、整った顔立ちをしているがやや鋭い目つきをしていた。

「ハア、ハア、……ふう」

今現在彼が走っているのは、幅の広い二車線の車道脇の歩道だった。

その歩道はとてもきれいに舗装されていて、走りやすそうだった。……まあ、走りやすいといっても地面は硬いアスファルトなので、足には良く無さそうであるが。

「む……？ あれは？」

そこで彼は何かを見つけたようにふと、足を止めた。

彼の視線の先には小さい　恐らく三、四歳程度だろう　子供
がいて、隣にはその子の母親がいて、子供と共に手を繋ぎ談笑し合
っていた。

その光景は、通行人の暖かい笑みを誘うような、そんな光景。

「フッ……」

そしてそれは彼も例外ではなく、顔には笑みが浮かんでいた。
だがしかし、それは普通の人が浮かべるそれではなく、何かを羨む
ような、悲しむような、そんな複雑な表情だった。

「……さて。また、走るとするか」

彼は何かを振り切るように数度頭を振り、再度走り始めようと
足を進めた。

そこに。

ガアアアアアン！！！！

「！？」

突然の大気を震わす轟音に驚き、音の発信源に顔を向けた。

そこには、猛スピードで疾走、いや、爆走と表した方が良好だろ
うか。

とてつもない速度で道路を暴走している大型トラックが、其処にはあった。

「オイオイ……！ 一体全体、何がどうなってんだ！？」

あまりの唐突な出来事に、思わず翔は狼狽える。

だがそれも束の間 翔はすぐさま冷静さを取り戻し、状況確認を急ぐ。

真っ先に運転手の状態を確認するため、ぐっと目を凝らす。するとそこには

「苦しんでる……？ もしかして、発作か何かか！？」

タイミングが悪い、と翔は吐き捨てるようにつぶやく。

現在、運転手は胸に手を当てうずくまっている。あれでは意識があるかどうかさえも怪しい。

ソレを確認したのち、翔の状況確認は次の段階に進む。それはつまり、トラックの進行方向への障害物の有無。

翔は急いでトラックの進行方向へと目を向ける。

「あれは……さっきの子供じゃないか……！」

結果は……障害物、アリ。

それは先ほどの子供で、真っ白な横断歩道にポカンとした様子で

呆けて突っ立っている。

両脇の歩道には通行人が集まっているが、だれも子供のもとに行こうとはしない。

親も必死に子供に向かって声をかけているが、全く反応を返さない。

「クッソッ!!」

翔は子供のもとへと必死に駆けた。だが、横断歩道までの距離が遠すぎる。

それに走るスピードが異様に遅い。そう、遅すぎるのだ。この距離に加えてこのスピード。到底間に合うことはないだろう。

そして、そんなことは翔もわかっていた。こんな状況でも冷静さを全く失わない彼の頭脳は、こう告げていた。

もう、間に合う訳が無い

それでも彼は走り続けた。諦めなかった、諦めなくなかったのだ。

でも、そんなことでこの現実はいっくら返せない。

彼が横断歩道の端に着き、人込みをすり抜けたところには、もうトラックと子供は衝突寸前。

……間に合う訳が無かった。所詮、彼の貧弱な身体能力では成し遂げられる所業などではなかったのだ。

しかし、もうムリだと確信しても尚、彼の表情には諦めなど浮かんでいなかった。

諦めて、たまるか……！

もう、何もできずに終わるのは嫌なんだ……！

そして、彼は思いつ切り足を踏み出し、跳躍しようとする。

バギン、と。

何かが碎けるような音が　弾け飛ぶような音が、脳の奥から聞こえた。

そして変化が起こった。

彼がおもいきり地面を蹴ると、辺りには爆発音のようなものが轟き、アスファルトの地面が抉れた。

そして、目にもとまらぬ速さで子供へと一直線に飛んでいき、彼は夢中で向こう側の歩道へと突き飛ばす。

それと同時にくる横からの衝撃。

『撥ねられた』。そう理解すると同時に、地面に激しく叩き付けられる。

さながらスーパーボールの様に、為す術も無いまま勢いよくバウンドしてゆく。

やがてその勢いは止まり、衝突によって生まれた衝撃は完全にストップした。

それと同時に、彼は悟る。

嗚呼、俺は、死ぬのか

と。

まるで他人事のように。何でもないように、ただ漠然とそう思った。

自分の命が流れ出ていくようなのを感じながら。

ふと、視界の隅に例の親子が見えた。

翔に向かって、必死に何かの声をかけている。目には涙を浮かべながら。

しかし、それは彼の耳には届かない。ダメージのせいで、感覚が狂いに狂っているのだ。

それでも、きっと心配してくれてるんだろうなあと思いながら。こんなことを、思いついた。

俺の人生、報われも、救われもしなかった

しかも最期はこんな終わり方。……本当に、まったくもって
最悪だ

……ま、でも

彼は微笑みながら。

こんな終わり方も

……悪くは……、ないかなあ。

そんな、実に下らない事を考えながら。

彼は、ゆっくりと

……意識を、手放したのだった。

これが俺、白石翔の最期。

実にありがちで、最っ低な幕引きだ。

……けれど俺は、こんな人生でも悪くはなかったって、そう思える。

偽善なのかもしれない。けれど、それが偽善だったとしても、一人の命を救うことはできた。

だから、俺は後悔なんてしてないしやって良かったって思ってる。たとえ俺の人生がどんなに無価値で、クソツタレなものだったとしても。意味はあった。決して無駄なんかじゃあなかった。

……少なくとも俺は

少なくとも俺は、そう、信じてる。

第一話 全テノ始まり。(後書き)

激しく駄文。

見返してからそう思う自分がここにいます。

さて、どうだったでしょうか？

遅くなって申し訳ありません。お待たせ……してないかもしれませんが。

最後まで読んでくださった方には感謝を。

できれば次回も読んでくださればと、そう思っております。

感想、誤字脱字の指摘等々、心よりお待ちしております。

第二話 黒の世界（前書き）

最初に、投稿がとても遅くなり申し訳ありませんでした。

もとより期待はしていませんが、これからは暇を見つけて次第投稿していくのでどうかよろしくお願いします。

第二話 黒の世界

『黒』。

表現するのなら、これが一番適当だろう。

あたり一面黒、黒、黒。見事に真っ暗だった。

そんな空間に、俺、白石翔はゆったりと身を任せるようにふわふわと漂っていた。

「……。此処は一体？ 俺は確か……。そう、死んだはずだが……」

脳裏には、先程の事故の光景が鮮明に映し出されていた。

そう、俺は死んだはずだ。死ぬ直前、意識を失う寸前までの記憶ははっきりとある。

と、なると……？

「死後の世界……。いや、地獄か……？」

死後の世界。冥界、地獄、天国、あの世。つまりは、その様な所なのだろうか？

流石にこんな一面漆黒の空間が天国だとは思えない。

天国なんて実際に見たことなどないし、そもそも本当にあるのかもわからないので断言できることもないが。

「……はあ。生前も生前だったら、死後も死後、か……。まったくもって、ついてない」

思わずタメ息が出る。

仕方も無いだろう。死んだと思ったらこんな密閉空間に閉じ込め

られ、抜け出す術もナシ。今のところは、だが。

タメ息だつてつきたくなる。イヤ、常人だつたらタメ息どころじゃない。こんな色彩に乏しく変化もクソも無いようなところに一人閉じ込められれば、いつ発狂したっておかしくないはずだ。多分。その辺は、自分の昔からある変な図太さのようなものに感謝といったところか。

しかし、これ以上ここにいくら無神経なヤツでも耐えきれないだろう。結果はわからないが、試してみたくもない。

「……ん？」

そんな実には下らない問答を脳内で繰り広げていると、何か遠くに光の点が見えた。

一面黒なのでイマイチ遠近感がつかめないが、心なしか、近づいてきているような気さえする。

と、いうか近づいてきている。しかも猛スピードで。先程衝突したトラックなど止まって見えるかのような速度で。冷静に分析なんかしているが、このままだと自分がヤバいのではないだろうか。

が、その心配は杞憂に終わったようだ。

ソレは俺の目の前でいきなりぴたりと止まる。

それは縦に長い何かであった。おおよそ縦2.5メートル、横0.7メートル程度だろうか。

特に目立った特徴もなく、装飾や突起している部分もない。それはただ、光り輝いていた。

横から見ると、厚さは存在ほとんど存在しない。紙のように薄っぺらいものだった。

裏も同様。特筆すべき点はない。

「……これはなんなんだ？ 俺の目の前で止まったということとは、何か意味があるのだろうか……」

この現在も神々しく発光しつづけている板がどういうモノなのかはまったくわからないが、何か仕掛けが施されているようにも見えない。

スイッチや、レバーなども存在しないし……。

危険かもしれないが、思い切って触れて反応を見るべきだろうか？
そう思いながらも、覚悟を決めて手首まで突っ込んでみる。
すると。

「……。え？」

思いつきり、吸い込まれた

それはもう、凄い勢いで。

第二話 黒の世界（後書き）

今後の展開を考え、章をつけさせてもらいました。

プロットもクソもない駄文ですが、脳内では結構長く続くつもりなので、よろしく願います。

お気に入り登録が二件！ ありがとうございます！

第三話 天界（前書き）

書いてみて思ったんですけど、なんだか一話一話で長さがまちまちだなあ……。

やっぱりこういうのはしっかりと統一した方がいいんでしょうかね……？

第三話 天界

そこは、縦に広い部屋であった。

一面同じ色で、コンクリートのような灰色の材質でできた壁によってその部屋は構築されていた。

そんななんの変哲もない部屋で、とりわけ異色を放っているものが二つ、存在していた。

一つは壁に埋め込まれているような巨大な扉。

その扉は見るからに重々しく、そして巨大だった。

縦はおおよそ十メートル、横は三メートルと少し。扉として捉えるにはかなり異様で、そもそも扉として機能するのかどうかも怪しい。

何人も通さない、とでもいつかの様に扉は隙間なく固く閉ざされている。

そしてもう一つ。

ソレは、この何も無い空間にはあまりにも不釣り合いで、本来其処にあるべきではない存在だった。

それは、一人のジャージ姿の男。黒髪で、肌の色は一般的。どこからどう見ても間違いない日本人であった。

名前は、白石翔。ある日、交通事故に巻き込まれ不幸にも即死してしまった男だった。まあ原因は主に自分自身にあるのだが。青年といっても間違いない風貌の男は、その冷たい床に倒れ伏していた。

瞬間、翔は呻き声を出しながらゆっくりと瞼を開けた。

そして、これまたゆっくりと両腕で体を起こす。翔は意識がまだ

はつきりとしていないのか、頭に手を当て少し振る。

やっと意識が戻ったのか、翔は此处がどこなのか確認するために首を回して辺りを見る。

「なんだ、此处……。さつきとは、また違うところか……」

翔は呟きながら、部屋の中を歩き回る。

「思い当たる点といえば、やはりあの光の扉だな……。あれは、ここへの転送装置のようなものだったのか……」

そして、例の巨大な扉の前へと立つ。何か仕掛けがないかを確認するように扉をコンコンとノックする。

「……出口はここしかない、か」

そして、翔はこの如何にも重そうで巨大な扉を全力で押し開ける。

「……ん？」

扉と床が擦れる音とともに、扉はいとも簡単に開いてしまった。開けた翔も、あまりの軽さに拍子抜けしたかのような表情を浮かべる。

壁を殴っても、拳に鈍い痛みが走るだけだった。　　どうやら、翔が超人になったわけではなく、単に扉が軽すぎただけだったようだ。

「……行くか」

痛む拳をさすりながら、扉の奥へ進む。

すると。

「……この距離を歩けっのか……」

扉の奥には、比喻ではなく、文字通り先も見えないというような道が果てしなく、延々と続いていた。

それは、とても長く、先ほどの部屋と同様に不自然なほど縦に長い道であった。

そんな一風変わった道を、一人の男が歩いている。いうまでもなく、それは翔だった。

延々に続く道だからと言って走るわけでもなく、ズボンのポケットに両手を突っ込みながらゆっくりと歩いていた。

「……いくら何でも、長すぎじゃないか、コレ」

どこまで続くんか、と翔は独りごちる。

最初こそ大した長さではないだろう、と油断していたが、何だか

んだでもう一時間近くは歩き続けている。愚痴りたくもなるだろう。もともと身体能力はそんなに高くない。というより、翔の身体能力は驚くほど低い。歩き続けているだけでも、かなりの体力を消耗しているのだ。精神はともかく、肉体的にはそれなりに辛くなっているのだろう。

そして。

「む……、やっと終わりか？」

突如、永遠に霞みつつけるかと思われた道の先が開ける。

出口は、入り口の際とは違い一般的なドアの大きさだった。穴はあるがしかし、扉などはなく、縦長に切り抜かれるようにして存在していた。

「……………」

やっと見えた出口に歓喜するわけでもなく、辺りを警戒しながら少し歩調を速めて進む。

そしてその先には、

「…………？ 広場、か…………？」

道の先には、やけに開けた場所があった。広場と言うには、少し簡素すぎるか。

いや、『そんなこと』よりも。

そんな普通の雰囲気、跡形もなく打ち壊してしまっているモノがある。

それは、何と表現したらよいのだろうか？

椅子？ 玉座？ いや、そんな言葉で表せるものではない。何故なら

……あまりにも、『デカすぎる』のだ。

普通に見たら、まず全貌を把握することはできない。壁と同色と
いうことで、背景と見間違えてもしまふ。

ソレは、はるか頭上を見上げることにようやく見える。

「……なん、だ……これは……」

翔も、そんな間の抜けた声しか発する事が出来ない。
只々、上を見上げていた。

ソレは、等間隔で数個、壁に沿って設置されていた。いや、数な
どは問題ではない一体なんなのだ、あれは？
明らかに実用的ではない。ではいったい何のためにあるのか？そ
んな疑問で翔の頭は一杯になっていた。

『まあそう狼狽えるんじゃない。ま、無理もないが』

「！？」

突然、何かの声が聞こえる。いや、『聞こえる』という表現は間
違いか。例えるのなら、そう、直接頭の中に音が響いた、とでも言
うべきか。翔は、何となく気持ち悪く感じた。鼓膜が振動すること
で伝わる工程をまるつきり無視した、その『聞こえ方』に。

「あなた……、何も知らない方にいきなり語りかけるなんて、失礼
ではないのですか？」

そんな声が、聞こえた。今度は先ほどのものではない。ちゃんと耳から聞こえる。

翔は、声がした方向へと顔を向ける。上だった。いや、正確には。

声の主は、“玉座にいつの間にか座っていた”。

その声に続くように、次々と声が部屋に響く。

「いやあ、親父は驚かすのが好きだからなあ！ 仕方がないだろうさ。んで？ わざわざ俺たちを呼んでまで、何を始めようってんだい？」

声とともに、次々とそれぞれの玉座に何かが現れていく。

「確かに、それは気になりますね？ 総員緊急招集とは、何か問題でも？ もしや、反乱の企てでも発覚しましたか？」

大男と、何処となく胡散臭い笑みを張り付けた青年がやはり玉座へと姿を現す。

「ふん、それこそ有り得ないだろう。反抗したところで、結局は碌な被害も与えられず潰される事ぐらい、連中にだって理解できているはずだ」

「でもでも、だとしたらなんで呼ばれたんでしょう？ 見たところ、その御方が関連していそうですね……？」

次いで、気の強そうな眼をした女と、ほんわかとした雰囲気を感じた女が現れる。

「……………」

そして最後に、灰色のフードを目深にかぶっていて表情の窺えない者が現れ、出現はそれでストップした。

そして、一番最初に現れた、中年ぐらいで、しかし眼力は全く衰えていない、そんな印象の男性が

「ようこそ、この多種多様な神が織りなす“天界”へ。この世界は、君の世界とは少し切り離された、しかしそれでいて絶対に届き得ない不可侵の領域だ。歓迎しよう、白石翔君。精々、心ゆくまで」

楽しんで行くと良い

。

第三話 天界（後書き）

明後日から旅行ということで、更新はこれから一週間ほど出来なくなります。

待っている方には申し訳ありませんが……、

……え？ 待ってない？

……とにかく、誤字脱字の報告、感想等々、作者は何時でも何時までもお待ちしておりますので、どうぞ宜しく願います。

第四話 爆発（前書き）

旅行から無事帰還しました、作者です。

疲れています、何とか投稿……！ 一週間以内というノルマをクリアしたぜ……！

まあノルマなどを課した覚えはありませんが。

第四話 爆発

訳が分からない。

それが今の翔の正直な感想だった。

真っ黒の空間で目覚めたと思ったら、其処は何やら無駄にデカい無機質な部屋。そして有り得ないほど長い道。それを抜けたら抜けたで次はデカすぎる玉座が何個もある部屋に。拳句の果てには何も無いはずの空間から人（？）が出現してきた。

実際に普通の人に話したら確実に病院に連れて行かれるような非現実な事象が、翔の目の前では当然のように起きている。

だからこそ、先ほどの感想。訳が分からない。どうやって自分はあの部屋に来たのか。そして彼らはどうやって、さながらマジックの様に虚空からいきなり出現できたのか。

翔の頭の中ではそんな疑問が渦巻き、混乱しまくっていた。

「ふむ、訳がわからない、といった顔をしているね？ まあ……、無理もないか。なにせ、君は『あちら側』の存在。理解できたらその方が問題だ」

憎たらしい笑顔を翔に向け、中年の男がそういった。

そして、その横の玉座へと腰かけている優しそうな女性が咎めるように言う。

「あなた、先程から本題に全く入っていませんよ。その御方がお困りになっているでしょう」

「む……、そういえばそうだな。いやあ悪い悪い」

全く悪く思つてなさそうな顔でそう言いながら、翔へと声をかける。

「ゴホン……、さて、白石翔君……、で、合っているね？ 今から君に色々と説明をするが、準備はいいかい？」

突然話しかけられた翔は少し驚きながら、男へ声を返す。

「いや……、ちょっと待つてくれ。さつきから、全く状況が読めないんだ。そもそもアンタは誰で、此処は一体何処なんだ？」

それを聞いた男は、笑顔をさらに深めながら、

「ふむ、それをハッキリさせるための説明を今からしようと思つていたのだが……。まあ君も混乱しているだろうし、まずはその疑問に答えようか。」

男は笑顔をそのままに、言葉を続ける。

「まず、私が誰なのか、ということだが……。君も、名前ぐらいなら知っているはずだ」

「何だ……？ もったいぶらずに早くしてくれ」

男は一息置くと、

「私の名前は、ゼウス……。」

ちなみに、長ったらしいミドルネ

「ムなどはないから安心してくれ」

訳が分からない。

翔は本日何度目かもわからない言葉を、心の中で叫んだ。

「……、おや？」

「状況も理解していないのに、そんなことを言えば余計に混乱するだけでしょ……」

不思議に思う男、もといゼウスに、女性が頭に手を当てあきれ返った声を出す。

「いやあ、親父はホント相変わらずだなあ！」

「……なんだか、彼がとても不憫に思えてきたのは私だけでしょうか？」

胡散臭い笑みを浮かべる男が、翔に対しての扱いに少し同情する。

しかし、翔にはそんなことは全く届いていない。どうやら、いきなり固まった彼を周りはパニックを起こしたのだらうと勘違いしているようだが、それは違う。

翔は、先程の彼の自己紹介とそれ以前の流れから今の状況を見出そうと必死に思考していただけである。

そんな翔に、中年オヤジ　もといゼウスが声をかける。

「うむ、少し話が突飛すぎたか。では先程の質問だが、この世界というのはな　」

だがしかし、ゼウスの声は遮られる。それは、翔。どうやら長い長い思考が終わったようで、顔を上に向け話しかける。

「　いや、大体分かった。大雑把にだが、やっと話が見えてきたようだ……。つまり、アンタは神サマって事なのだろう？　そして、此処は天国　　いや、確か“天界”などと言っていたか……」

その言葉に、ゼウスとほかの面々は驚きを見せる。フード野郎（いや、男かは分からないが）以外は。

「ほう……。なかなかどうして、君は鋭いな。うむ、その認識で構わない。だがしかし、それだけでは少し足りない。君の世界には、私を含めた多数の神について述べられた、所謂『神話』といったものが有ると思うが……。それらは“管”^{くだ}を通ったことで歪みに歪みまくったものでね？　君の知識とはかなりのズレが生じていると思っ
ておいた方がいい」

「管」……？ズレ……？……一体何を言っているんだ？」

聞き慣れないその言葉に、翔は疑問を口に出す。

「……まあ、その話は追ってすることにしよう。……というか、それよりも物分りが良すぎじゃないか？ これまでの出来事で混乱しているだろうし、何故私達が神だ、と容易に信じられるのかね？」

混乱させるような事をしたのは自覚しているのか、と翔は心の中で呟く。確信犯か、とも思った。

「……信じた、というよりも、信じざるを得ない……といったほうが良いか……。これだけ非現実な光景を目の前で何度も見せられては、神か、それと同等の何か、と思う事しか出来ない」

「ふむ……、成程。ま、取りあえず君の頭の整理は終わったようだからドンドン続きを説明していこうか」

ゼウスは一層笑みを深めて、

「それはつまり、君が何故“ココ”に呼ばれたか、と言う事だ」

やっと本題か、と翔は溜息をつく。

翔としては、それが一番気になっている所だった。ただの人間が、何故天界などというぶっ飛んだ所に連れてこられたのか。それが知りたかった。

「ま、取りあえずはこれを腕に付けてくれたまえ」

ブン、という音と共に、床に腕輪のようなものが出現する。

どうやってやったのか、というツツコミはやめることにした。翔は既に諦めている。

「……………」

翔は無言でそれを付ける。

すると、頭上に画面が浮かび上がる。どこから映されているのかは分からない。ただ、恐らくまたとんでもない技術（魔法？）でも使われているんだろうな、と翔は思った。

完全に他人事である。

その画面には、何か表のようなものが見て取れた。それは、

名前	白石 翔
性別	男
年齢	18
種族	人間
総合身体能力	G 詳細は省略しています。
天力	なし

魔力

なし

特殊付与物

???

エラー。この特殊付与物は表示不可です。

それを見ても、翔には分からなかった。そこまで複雑では無いが見慣れない、というか見たこともない言葉が多数ある。『特殊付与物』という物は何なのだろうか？ と、翔は思っていると、他の神々が口を開く。

「何だあ？ こりゃ？ 総合身体能力がGって……、平凡な人間の平均能力……どころか、それ以下じゃないか。これが何なんだ？」

「そうですね……。人間ですから当たり前のことですが天力や魔力にも秀でてはいませんし……。気になる点と言えば、表示不可とされている特殊付与物ですか……」

「フン……、人間の特殊付与物と言ったら“試練”のことだろう。……だが、解析の『天術』が染み込まれたその腕輪なら“試練”の類は表示されるはずだ」

「つまり、解析の『天術』でさえも解析しきれないもの、と言う事

でしょう？　ですが、私はそのようなものは聞いたことが有りません……」

「うーん……、何なんでしょうねえ？　多分この特殊付与物が本題に関係していると思うんですけど……。腕輪の故障、でしょうか……？」

「……………」

理解できない単語ばかりが含まれる会話に、翔が入れる余地はなかった。

そんな混乱した場で、一人眉をひそめている者がいた。
ゼウスだ。

「……………？　これは一体……？　聞いた話とは違うぞ……。
まさか」

独り言をつぶやいた後、ゼウスはいきなり血相を変える。すると、

ビイイイツ？　ビイイイツ？　と。

けたたましい警報音が玉座の部屋に響いた。それと共に感情の籠っていない人工音声が何かを喋り出す。

『警告。警告。正体不明エネルギー体の急速な集束を確認。予測の
できない事態が起こる可能性があります。周りの方は迅速に防御態
勢を固めてください。警告。警告』

その警告に、ゼウスが慌てて声を張り上げる。

「総員、防御体制に移れ！ 良いか、今出せる全力を全て防御に
」

しかし、その声は途中で途切れた。

翔を中心とした、『爆発』によって。

第四話 爆発（後書き）

長引きまくる現状説明。すいません。まだプロローグ的なものを消化しきれいていません……。明日は一日中暇なので、頑張って投稿してみます。

ストックをためていれば良かったと、いまさら後悔。

第五話 試練（前書き）

よっしゃー！ やつと長い説明が終わったー！

……と思つたら、終わつてない？ そ、そんな馬鹿な！ 当初は長くても2、3話で終わらせるつもりだったのに、何だこのグダグダな説明は！

もうハッキリ言つて長すぎて自分でも何を書いてるかわか（ry

……いや、なんだかホントに、すいませんでした……。

第五話 試練

爆発。

辞書で調べると、『物質が急激な化学変化または物理変化を起こし、体積が一瞬に著しく増大して、音や破壊作用を伴う現象』と述べられている。尚、ガス・粉塵・火薬等の化学的爆発は発熱反応が激しく行われる事によって起きる物で、核分裂による『核爆発』という物もある。

回りくどい説明を続けたがつまり何が言いたいかというと。爆発という事象を起こすには、何らかの『触媒』が必要で、決して何もない場所からいきなり爆発する、何てことは有り得ないはずだ、と言う事だ。

……そう、この説明が正しいとしたら

今翔の目の前で起こった爆発は、一体何なのだろうか？

もうもうと煙がたちこめていた。

その煙は、翔の視界を完全にシャットアウトさせ、気管へと思い切り入っていく。

もちろんその煙に耐えられるはずもなく、翔はたまらずむせてしまふ。

「う……、うぐ」

やっと喉の調子が戻ってきたようで、翔は辺りを見回す。どうやら先ほどよりも少し視界が開けてきたようで、自分の周辺ぐらいはハッキリと見える。そして、見つけた。

（な……、何だ、これは　？）

自分を中心として、クレーター　　と言っても小規模のものだが

があつた。頑丈そうで、硬質のコンクリートのような材質で出来ていた床は、思い切り決れている。そこで、翔は疑問に思う。

（何故爆発の中心にいた自分は無傷なんだ……？ いや、そもそもなんで爆発が起きた？ しかも自分を中心として……）

そう、翔は無傷だった。変わった点と言えば、埃によってジャージが少し汚れたぐらいか。あんな爆発が起きたのにもかかわらず、だ。

ひとまず翔はその疑問を頭の片隅にとどめ、再度周りを観察する。視界はかなり開けてきた。翔は、先程のゼウスがいた玉座へと目を向ける。しかし、ゼウスは見えなかった。

その代わり、翔の目に飛び込んできたのは。

“巨大な盾”であつた。

その盾は、兎に角巨大で、先程神達がいた全ての玉座を覆い隠していた。まるで先ほどの爆発から神々を守るように。いや、実際そうなのだろう。翔は、ゼウスの最後の言葉を聞いていた。

（……確か、防御がなんとか、等と言っていたが……）

恐らく、その防御とやらがこれなのだろう、と翔は思う。いやに落ち着いているが、実はただ混乱しすぎて現実から逃避しているだけである。すると、盾の向こう側からくぐもった声が聞こえる。

「いやあ吃驚した。助かったよ、さすが我が娘！」

「……礼には及びません」

「は、はう……、すごい衝撃でした……。なんだか今もクラクラしているような……」

「俺もだ……。というか何が起きた？」

「さあ……。天力が魔力の暴走でしょうか？」

「……確か、先程のステータスでは天力や魔力の類はゼロのことでしたが……。分かりませんね、たとえ天力や魔力だとしても感知されない訳は無いはずですが」

しかし、その話声は途絶える。

ビシッ、と。

巨大な盾に入った、巨大な亀裂によって。

亀裂は、次々と数を増やしていき、盾を崩壊させていく。崩壊によってできた破片は、床に落ちる事は無く、粒子に変化しながら虚空へと消えていく。盾が崩壊したことによって、ゼウスたちがようやく見える。

「どうやら、予想外の事態が発生してしまったようだ。第……何回かは忘れたが、緊急会議を中断する。……後は私が何とかするから、

皆は先に帰ってくれていい」

「あなたに任せると、嫌な予感しかしないのですが……、まあ、この状況で会議を続行する訳にはいかないでしょうね……」

「ってーと、もう終わりなのか？ それなら俺は帰るぜー。ねむてーしなあ……」

「釈然としませんが……、まあ今のところは退散しましょうか。後でしっかりと説明を頼みますよ？」

「う、うう……なんだか、状況が全く理解できないんですけど……。つまりは、もう戻っていいって事なんですよね……？」

「……………」

そんな声とともに、神々は次々と消えていく。翔は、ただその光景をボーッと見る事しかできなかった。そんな翔に、ゼウスは声をかける。

「混乱しているところ済まないが、此处は閑談する場所として適さなくなってしまったようだ。少し落ち着いて話せる場所へ移動しよう」

「あ……？ おい、ま」

翔は、玉座の部屋から一瞬で消えていった。

「
!?」

突然変わった視界に驚き、つんのめるようにして地面に立つ。其処は、先程の部屋と打って変わってずいぶんと機能的な部屋だった。高級感漂う家具がバランスよく配置されている。そんな比較的普通な部屋に対して、翔は違和感を覚える。それは、

（ドアが、無い……？）

そう。この部屋には、出口といったものが存在していない。非常口さえもない。完全にこの部屋は密閉空間と化している。よく見ると、この部屋の壁や床も、灰色の材質によって構築されている。不思議がっていると、翔の目の前にある、高価そうな机とセットに

なつた椅子に何かが現れた。

ゼウスだ。

「やあやあ、翔君。気分はどうだい？ 最高かい？ それとも最低？」

ウンザリするほど陽気なゼウスに、翔は疲れたような声で、

「……別に普通だ。良くも悪くも無い」

「ふむ。まあ、悪くはないのだから、これは喜ぶべき事なのかな？」

知るか、と翔は素っ気なく返す。

「おやおや、冷たいねえ。もっと乗ってくれても良いんじゃないのかい？ そういうのをKYというのだよ？」

翔は、沸き起こる怒気を抑えながら、

「……黙れ。さっさと本題に入るんだ」

やれやれ怖いなあ、と肩を竦めながら、ゼウスは“少し”真剣な顔へ切り替わる。

そして。

「……ふむ、本題と言っても、何から話していいかわからないんだ。君は一番何がききたい？」

翔はこのお調子者を抑えるのを諦めながら質問をする。

「……何故、俺は生きている？ 俺の記憶が正しければ、確かに死んだはずだ……。だというのに、俺は確かにここに存在している。一体、何がどうなっているんだ……？ それとも、死んだ奴は誰でもこんな風になるのか……？」

ゼウスは、愉快そうに口元を歪めながら、

「それを説明するには、かなり複雑な事情が絡みまくっていてね？ まあ、率直に言う……、君が“特別”だから、かな？」

そんな馬鹿な、と翔は思った。自分の事は自分が一番解っている。自分は、どんなに努力したって人並み以下。それを誰よりも分かっているからこそ、翔は淡々と、無機質な声でゼウスに話す。

「……それは有り得ない。俺は、“特別”などという言葉から一番離れている人間だ。……それは、努力をしても、しなくとも、決して変わらない事実だ」

他人事のように自分を表現した翔に、ゼウスは、

「なあ、翔君。……君は、“試練”という物を知っているかい？」

「……？ 何を言っている？」

「うん、そうだね、知っているはずがない。もちろん言葉の意味は分かると思うがね。“試練”なんて、『天界』や『冥界』の者しか知らない筈だ」

「さっきから何なんだ？ 試練……？」

「……………」

ゼウスは、長い間沈黙しながら、

「…………“試練”とは、人間界の者全てが持っている物だ。つまりは、君も例外ではない。君も、その“試練”をその身に宿していた…………」

「…………何だって？」

“試練”とは、すべての人類が持っているもの。つまりは、翔もそれは分かった。だが、それが何だというのか？ 翔も例外ではないと言う事は、ほかの人間と同じと言う事ではないか。

「そのどこが“特別”なんだ？ というか、“試練”とは何なんだ…………？」

「…………“試練”というのは、その人間がどれだけ努力し、そして世の中に貢献したかを測る、いわば物差しのようなものだ。…………その“試練”を何段階達成したかで、その人間の死後の処遇が決まる…………」

「…………そんなものが、本当にあるのか…………？」

ゼウスは苦笑しながら、

「俄かには信じがたいことだとは思うがね…………。こちらでは常識のようなものだよ」

「……………」

翔は眉間に皺を寄せながら、

「……その話が事実だとして、何故俺が“特別”と言う事になるんだ？ 普通に死んで、普通に処遇を決定される。……それだけじゃないのか？」

ゼウスは少し黙りながら、

「……………それは違う。君自身の事だ、よく解っているとは思うが……、自分を、不幸『すぎる』と思った事は無いかね？」

「？」

翔はその言葉を聞き、少し身を固めた。だが、数秒でもとに戻り、そして口を開ける。

「……不幸、ね。……ああ、そう思ったことなんて数え切れないほどあるさ。人間なんて、そんなモノだろう？」

翔は空虚な笑みを浮かべながら、それだけ言った。
そんな翔を真っ直ぐ見ながらゼウスは、

「……そう、だね。そんなモノだ。だけど、違うんだよ。“そんなつまらない事”を言っているのではない」

翔は、黙っている。

「……君の歩んできた人生は、悪いが覗かせてもらった。隠し事なんて、私の前ではできないのだよ？」

そのまま黙っているかと思われていた翔だが、唐突に口を開けた。

「……どう思った？」

「……そうだね、どう思ったと思う？」

翔は少し間を開けてから、

「目も当てられないほど痛々しくて、目も当てられないほど醜くて、目も当てられないほど無様だ。……客観的に見て、俺はそう思うよ」

「………。そうだね。全く持ってその通りだ。神の私でさえ覗いたのを後悔してしまうほどだ。……凄まじかったよ」

「……………」

「……………」

双方とも黙る。しかし、沈黙は長くは続かない。

「……それで、いい加減説明してくれないか？ 俺の何が、何処が“特別”だというんだ？」

痺れを切らした翔が、ゼウスにそう質問する。

「……“試練”だよ」

「……………何がだ？」

「
“特別”
”
な
のは、
君の
“試練”
”
だ
」

第五話 試練（後書き）

書いてたらこんなに長くなった説明。一体どうなってるの……。い、いや、きっと次話ではこの長つたらしいのが終わっているはず！

多分、きっと、恐らく、メイビー……。……………。

終わらせてやる！ この永遠に続く悲劇（という名の説明）を！

感想、誤字脱字、文法の誤りなどの指摘等々、いつでもお待ちしております。というか、お願いします。 必死

第六話 特別報酬（前書き）

どうも。友人に思いつ切りボールをなげられた（顔面）、作者です。ちなみに、無事でした。

これでやっと長い説明は終わりです！ ああ、長かった……。まあ長くした張本人は私ですが。スイマセン。ホントにスイマセン。

相変わらず文字数が滅茶苦茶ですが、読んでやってください。

第六話 特別報酬

「特別なのは、君の“試練”だ」

ゼウスは、何やら自信たつぷりな顔で翔に言い放つ。そして翔は、

「……………はあ？」

そんな間の抜けた言葉しか返せない。

「……………どういう事だ？ “試練”というのは、全人類に平等に配布される物なんだろう？ ……ただの物差しに、違いも何もないんじゃないか」

至極真つ当な指摘に対し、しかしゼウスは余裕の態度を崩さない。

「それを話すには、ある男の話をしなきゃならないんだが……………」

ゼウスは腕組みをしながら、

「その男は、神だったんだ。それもかなり高位の。普通、高位の神となると何もしない。全てを侍女天使に任せ、ただただ自堕落な生活を過ごし続けるというのが一般的だ。……………ただ、そいつはかなり変わった奴だね。何を血迷ったのか、天界には厭きたから人間界の“試練”を研究する、などと言い始めた」

ゼウスはどこからか出したグラスに水を注ぐと、それで喉を潤す。

「実の所、それは研究などという言葉で表せる物ではなくなっていた。改悪に改悪を重ね、“試練”は全く違うものに変化してしまったんだ」

「……どう、なったんだ？」

ゼウスは翔の質問に、

「……それはもはや人間の魂をはかる物差しでは無くなった。人間の肉体成長を抑圧し、精神を摩耗させ、廃人に変える。最早“試練”とも呼べない、悍ましい兵器と化したんだ……」

翔は少し黙った後、

「……もしかして、その“試練”は……」

その問いかけに、ゼウスは顔に影を落としながら答える。

「そう。……その“試練”というのは、白石翔君。君の“試練”だ」

「……何故」

翔は無表情を貫きながら、言葉を発する。

「……何故、よりもよって俺に？」

「もともと、『ソレ』は天界のある場所で厳重に保管していた。……
…万が一にも、人間界に漏れる訳にはいかなかったからね。……だが、漏れてしまった。原因は……」

ゼウスが言いよどむのを見た翔は、次の言葉を促した。

「原因は？」

「……………」

「“わからない”んだ」

「……………？　どういう事だ」

「分からないんだよ。どうやってその場所を見つけたのか、どうやって侵入したのか、どうやって封印を解いたのか。そして、どうやって人間界に漏洩させたのか」

ゼウスの答えに、翔は疑問を隠さない。

「……そんなこと、有り得るのか？　神っていうのは、全知全能。できない事は何もない。そうじゃないのか？」

「わからないんだよ。誰が、どうやって、どうしてそんな事をしたのか。痕跡すらも掴めないんだ」

ゼウスは顔を伏せながら、悲痛そうに言葉を続ける。

「『ソレ』が君に入り込んだのは、勿論偶然だ。……だが、『ソレ』を人間界に逃がしたのは、紛れもなく、私達だ。言い訳なんてできる訳もない……………」

「……………」

黙り込んだゼウスに、翔は一言だけ、何でもないように言う。

「そうか。それで？　それがどうした？」

「……………、え？」

ゼウスは、翔の言葉が理解できない、といった風に呆然としている。

「だから、それがどうしたと言っているんだ。何を呆けている。…
…似合わんぞ」

対して翔は、面倒くさそうに返事をする。そんな翔に、ゼウスは慌ててまくしたてる。

「い、いやいや！　ちよつと待ってくれ？　そうじゃないだろう！
？　普通、そんな事を言われたら、ふざけんな、俺の人生滅茶苦茶にしゃがつてーッ？　とか、じゃあテメエの命で償いやがれ？　とか、そういう展開に発展するんじゃないのか！？」

「俺に聞かれてもな……。文句を言っても生き返るわけでもなし、それにお前が死んでも何ら得はないだろうが。……何だ、それともお仕置きが欲しくて欲しくてたまらない、ドMオヤジなのかお前は？」

「……いや、そういう事では無いが……。君の人生、私達神に全て奪い取られたのと殆んど変わらないんだぞ？ ……なのに、何故そんなことを言える……？」

ゼウスは全く理解できないといった感じで問いかける。それに翔は、

「……お前なのか？」

「うん？」

「……俺の“試練”とやらのを作ったのは、お前なのか？」

その言葉にゼウスはうつ、と言葉を詰まらせながら、

「……いや、そういう訳では無いが、しかし……」

なおもしつこく食い下がるゼウスに対し、翔は遠慮容赦なくその親切をぶった切る。

「それなら、俺にはどうする権利もない。強いて言うのなら、その“試練”とやらを作ったマッドサイエンティスト野郎はぶん殴ってやりたい所だが」

「……本当に、それでいいのか？」

「くどい。良いと言ってるんだ。ありがたみをもって許しを受け取れ」

冗談めかして翔がそう言つと、ゼウスはポカーンとした表情から一転、呆れたような苦笑を浮かべる。

「なんというか……、君は、私たち神よりもずっと神らしいな……」

「そついうお前も、俺たち人間よりもずっと人間らしいと思うが？」

会話を終えると、ゼウスは思いつ切り笑い出した。

「……なんというか、何を言われるかビクビクしていた私がバカみたいだよ」

「それを俺に言われてもな。まあ、結果オーライという所じゃないか？」

ゼウスが先ほどの会話の応酬の感想を述べると、翔がそう答える。

「……何だか、君が昔からの友人だと錯覚してしまうよ。つくづく変わった奴だ」

「そんなフレンドリーなキャラになった覚えはないが……それで、話はもう終わりなのか？」

そう質問すると、ゼウスはまたもや険しい顔に戻る。

「いや、まだだ。むしろ、これからが本題だ」

「……まだ続くのか？」

疲れた声を出す翔に、苦笑を返すゼウス。

「長い話ですまない。だが、やっと終わりだ。翔君、君は死ぬ直前の出来事を覚えているかい？」

「つまり、死因と言う事か？ ……確か、暴走トラックにぶち当たった記憶はある。……ああ、それと柄にもなく女の子を庇ったんだっか」

「何というか、君は本当に驕るということをしてないねえ……。まあそれはどうでもいい。聞きたいのは、死ぬ直前、何か『変わった事』がなかったかい？」

「変わった事？」

死ぬ前の記憶を思い起こしてみる。撥ねられたとき……。普通に死んだはずだ。何かあったか……。？と翔が必死に思いだしている
と、一つ、思い当たることが有った。

「よく覚えていないが、女の子を突き飛ばそうとした時、超人的身体能力を発揮したような……。気のせいだったか？」

その言葉に、ゼウスはほくそ笑む。

「いやいや、間違っていないよ。決して君の妄想や幻視などでは断じてない。それはね、いうなら“試験”の達成ボーナスといったところかな？」

「達成ボーナス？」

ゼウスはウンウンと頷いて、

「そう、達成ボーナス。分かりにくいから特別試験と呼ぶが……。特別試験はただ依り代を食らい尽くすだけのものでは実は無いんだ。条件がある程度達成すると、さっき言った『達成ボーナス』みたいなものが貰える」

だが、とゼウスは続ける。

「実際はその条件を達成するまでに生きているはずはないから、ほとんど意味のないモノに等しい。……だが、君には本当に驚かされる。まさかその年で完全達成を果たしているなんてねえ……」

まあ、それを発揮する前に死んでしまったようだが、と溜息をつくゼウスに、翔は質問をする。

「それで、その達成ボーナスとやらの内容は？ 死ぬ前のように、身体能力が飛躍的に上がるとかか？」

「確かにそれもあるが、それだけじゃあない」

ゼウスは、自分の前にある机の上をトントン、と叩くと、瞬く間に分厚い纏められた紙が現れる。

「これは、例の研究者のレポートだ。これを見て分かった事だが……。これを見てくれ」

パラパラと紙をめくり、あるページでめくるのを止める。そこには、

「なになに……、本試練を達成した際の報酬一覧……。一、抑圧された身体能力、その他の飛躍的上昇。二、創造能力。ただし簡易的なもの。三、本試練を授かった人物によって異なる何らかの能力。……って、何だこれは？」

紙面を持ち上げ音読しながら、疑問を口に出す翔。

「うん。つまり簡単にまとめると、一はこれまで特別試練によって押さえつけられていた身体能力や、幸運とかがかなり上昇する。二

は、未熟だけど、大体何でも作れる能力だ。勿論、生物関連は無理だけだね？」

「じゃあ、三は？　これだけあまりにもアバウト過ぎやしないか。能力と言っても、どんな？」

その質問にゼウスは眉根をひそめながら、

「……実は、この三の能力だけは詳細が判明していないんだ。レポートを調べても、この能力についての記述が全く見当たらない。謎に包まれている、何とも不明瞭な能力なんだよ」

「……そうか」

レポートを机に戻し、顎に手を当てる。

「……。なあ、ゼウス。俺は、これからどうなるんだ？」

「そうだね。……君はどうしたい？」

翔は大きくため息をつきながら、

「どうせ、元の世界には戻れないだろう？　こんな能力を持っている人間を元の世界に放り込むわけにもいかないし、そもそもこの能力もよく解らないと来た。大方、能力を消すこともできないんだろ」

「ああ。……すまない。だが、君の能力は人間界にはデカすぎる。……いまさら神だなんて言えないが、世界にあらぬ混乱を起こす訳にはいかないんだ」

対して翔は、何でもないように肩を竦めて、

「……別に。どうせあの世界にいても居場所は無い。それなら、いつそ死んだ方がマシだった、と思うべきなのかもな」

翔がそういうと、ゼウスは申し訳なさそうに顔を伏せる。

「……すまない」

再度謝るゼウスに、鬱陶しいといった感じで翔は手を振ると、

「もう良いといっただろうが。気にしていない……、と言ったら嘘になるが、お前を責めてもしょうがない」

それよりも、と翔は言葉を続ける。

「これから俺はどうなる？ 天国か地獄行きか？ それとも、何かに生まれ変わるとかか？」

翔の発言に、ゼウスは首を横に振る。

「いや、違う。君にくっ付いていた特別試練は、確かに消えはしたが、消失に伴って発現した能力は、今でも確かに残っている。そんな状態で、肉体と魂を弄ることはできないからね」

「……それで？」

よく解らないが、そういうものなのか、と納得しつつ翔が聞くと、ゼウスは大きく胸を張り、

「君は、この世界、すなわち『天界』で　私が責任をもって保護する。……それに、これだけの事を君にして、当たり前のように放り出すなんて神の名が廃るってものだからね！　最大限のサービスを約束しよう！」

何やらとてもやる気に満ちているゼウスに、翔は少し嫌な予感をおぼえる。

「おいちよつと待て。お前一体何をする気だ。俺はあまり目立つのは好きじゃ無いんだが」

「む、何だ欲のない。私は神なのだから幾らでも願いは聞くよ？」

何だか上機嫌なゼウスに、翔はウンザリといった感じで、

「結構だ。お前に何か任せると何かとんでもないことになる気がする」

「ふむ、何だつまらない。まあでも、最低限の衣食住は必要だろう？　えゝ……、今空いてる天使はいるかな？　……お、いたいた。よし、ちよつと私の部屋に来てくれ」

何やらゼウスがぶつぶつと呟いている。頭がおかしくなったか。……いや、元々か。と、翔が失礼極まりないことを考えていると、ゼウスの横に何かが現れる。

「お呼びでしょうか。ゼウス様」

それは、とても綺麗で美しい女性だった。いや、そもそも天界に

性別の違いという物はあるのだろうか……？ と翔が疑問に思っている、

「ああ、ちょっと頼みたいことがあってね。たしか、使われていない空き空間がまだ残っていただろう？ そこにこの人を案内してくれ」

そう言って翔の方を指さす。天界では見慣れない、というかいるはずのない人間がいて少し驚いたのか、翔の方を凝視する。一方凝視された翔は、少し面倒くさそうな顔をしながらその視線をスルーする。

「……了解しました。それでは直ちに案内を」

「ああ、頼むよ。空間は既にセッティング済みだから君は案内するだけでいい」

翔から視線を外した女性がさういって、ゼウスはにこやかにそう告げる。だがちょっと待て。翔は少し疑問に思う。

「おい、案内と言っても、出口がないんだが」

どうするんだ？ と続けようとした翔は、しかし言い切ることは出来なかった。

本日何度目かもわからない、謎の瞬間移動によって。

『いや、無事に着いたみたいだね。どうだ、良い所だろう？』

そんな能天気な声が、部屋には響いた。

その部屋は、マンションの一室のようであつた。そこそこ広いリビングルームと、それにくっ付くように存在している寝室等の小部屋。冷蔵庫やキッチン、洗濯機など、生活に必要な道具も配置されておりすぐにでも住めるようになってゐる。

そんな極一般的な部屋のソファに、一人の男が座っている。黒髪黒目、背は高く、顔は整つていると言えなくもない。鋭く冷め切つた目が特徴的なその男、白石翔は電話の親機ではなく子機の方を手に取り、だれかと話していた。

「無事じゃ無い！ いきなり移動させやがって……」

『いやあ、ゴメンゴメン。ところで、箆笥にある着替えの衣服は揃つてゐるかい？』

「いや、話題の逸らし方無理矢理過ぎだろう」

翔は、見えない電話相手に向かって思い切り呆れる。

「というか、此処もまた出口という物が無いんだが……。どうやって出ると言つんだ」

『この天界という世界は、多くの空間が集まって構築されていてね？ 空間を物理的に繋げることは出来ないし、そもそもここに住ん

でる神や天使にとって空間を移動することは歩くよりも簡単なことだから、全く困る事は無いんだよ』

「今俺が現在進行形で困っているところなんだが」

翔のもつともな指摘に、ゼウスは大丈夫大丈夫、と返す。

『出たくなったら、電話の横にある電話帳に天使、って書いてある真下の電話番号にかければ、天使が部屋に来て君を出してくれるはずだから』

「それを先に言え。……だが、日の光も何もないこんな所にいたら息がつまりそうだ」

それは慣れてもらうしか無いねえ、とゼウスがいう。

『そうそう。そこ、ちゃんとお風呂もあるし、食材とか衣服も、少なくなったら自動的に補充されるから。ま、何か困ったことがあったらまたかければいい』

じゃあね、とゼウスは電話を切る。

「……あの野郎、一方的にかけて一方的に切りやがった……」

愚痴りながら、子機を元の場所に戻す。ちなみに部屋にはちゃんと電気がある。調べるとちゃんとガスが通っているようで、キッチンの火はしっかりついた。水も出た。電気や水道はどこから引いているのだろうか？ 謎だ。

「……さて、もう寝るか」

色んなことが有りすぎて疲れた翔は、風呂に入る気もわかず寝室のドアを開ける。寝室にあるベッドは清潔で、とても寝心地がよさそうだ。

翔は欠伸をしつつ、ベッドへと入り込む。特にすることもないので、さっさと電気を消して寝る態勢に入る。どうやら相当疲れていたようで、すぐに猛烈な睡魔が襲い掛かる。

まどろむ意識の中で翔は、一つ、不思議に思った。
それは、

（ 何故、全部日本語なんだ……？ ）

第六話 特別報酬（後書き）

これで、これでやっと話が進む……！タグに『主人公最強』とか、『ハーレム』とか、そんなモノを七話目にして全く書いてないけど、ようやくそんな感じのが出せる……！

あ、でも期待を裏切る可能性大です。それでも、精一杯書くので、よろしく願います。

ああ、ランキングのりたいなあ……（遠い目）。

感想、誤字脱字、誤った文法の指摘など、宜しく願います。
作者は何時でも待つております。

第七話 決闘？（前書き）

最近、リアルが殺人的忙しさです。本当に死にそう。

まあそんなことは置いといて、遅れてしまつてすいません。
では第七話、どうぞ！

第七話 決闘？

天界には、時間という概念がない。

必要ないのだ。

天界の神は、好きな時に食事をし、好きな時に起床し、好きな時に寝る。天使でさえ、呼ばれたときにだけ、最低限度の動きしかない。

天界では、誰もいなくとも半永久的に稼働し続けるシステムを、『天術』と呼ばれる魔法のようなもので構築している。

つまり、よほどのことがない限り働く必要がない。まあ、中には自分から進んで働く物好きな者もいることにはいるが。

だが、時間が無いと言っても生活リズムは皆ほとんど同じ。特に決まっているわけでもないが、其処は暗黙の了解、といったところだろうか。他の者が寝始めると、自分も寝る。そんなモノなのだ。

まあそれはさておき。

今、翔はゼウスに呼び出されていた。

そこはまるで、よくドラマで出てくるオフィスの大会議室のようであった。円を引き延ばして楕円にしたような長いテーブルに、椅子が数個、収められていた。

そんな部屋に、以前の玉座の部屋にいた面子がそろっている。全員座っていた。

が、突如ブロンドの髪を持つ美しい女性が、席を勢いよく立つ。そして翔を睨みつけながら言った。

「決闘だ！ 天界からは出て行って貰おう？」

何故こうなった？ と、翔は少し現実逃避をし始める。

発端は、一つの電話。

ふかふかのベッドから起き上がり、目を覚まそうと顔を洗ってさてこれからどうしようかと丁度考えていたところ。

部屋に備え付けてあった電話から、独特な電子音が発せられる。画面を見ると、ゼウスからだった。何なのだろうと不思議に思いつながら受話器をとると、

『やあおはよう翔君！ 快眠だったかい？ ちなみに私はとてもよく眠れたよ！』

と、寝起きには少しばかりきつい快活な声に顔を^{しか}顰めながらも、受話器に向かい話しかける。

「何の用だゼウス……。モーニングコールなんぞ頼んだ覚えはないが」

如何にも不機嫌そうなその声に、ゼウスはまたも無駄に明るいつ返しを返す。

『いや、ちょっと君に頼みたいことが有ってね。私が君と初めて会った時の事なんだが。其処には、私だけでなく他にも来ていた者がいたろう？』

翔は真っ先に玉座の部屋の事を思い出す。そういえば、ゼウス以外にも変な連中がいた。

「ああ……、あの、何だかとても愉快的連中の事か？」

翔の皮肉に、ゼウスはうんうん、と言いながら答える。

『いったん帰るように言っただけど、後々キミがなんでここに居るのか、とか、とにかく色々質問されてね。つい口が滑ってしまっただ』

「おい、何してんだこの野郎」

ゼウスは、ゴメンゴメン、と全く悪く思っただけで無さそうな声で適当に返す。

『それでね。君の事情を聞いて、ぜひ一度会ってみたい、と言う事で自己紹介の場を用意することにしたんだ』

一人だけあまり乗り気じゃないのもいたんだけどね、と付け加える。

それを聞いた翔は、心底呆れた声で、

「お前な、そういうのはまず本人に了承を得るべきじゃないのか？」

『まあまあ。自己紹介ぐらいいいじゃない。それに、一応あの者達は有名な神だよ？ 多分、君も一度くらいは聞いたことのある神がいるだろう。会ってみたくはないのかい？』

「いや、別に」

あんな連中と積極的にかかり合いたくもない。

きつぱりと答えた翔に対して、ゼウスは一言、ふむ、というと、

『そうかい？ まあでも君に拒否権はあまりない。……四の五の言わずさつさと来い』

「それはもはや『頼み』とは言わないんじゃないか……」

翔は、はあ、とため息を吐いてから、

「……わかったよ。行けばいいんだろう、行けば。ただし自己紹介だけだぞ。それが終わったらすぐに帰るからなすぐに」

その言葉にゼウスは、ウザい声をさらにウザくさせながら、

『おお、来てくれるかい！ いやあよかったよかった！ 時間になったら天使を君の部屋によこすから、それで来てくれ。じゃあまた会おう！』

そうゼウスが締めくくると同時に、ブツリと電話が切れた。

切れた電話を無表情に見つめたまま、

「神、か……。……面倒くさいな、全く」

そうぼやいて、受話器を戻す。

今の翔の格好は黒のパンツに白いシャツ姿だった。起きた時に着替えたのだ。

リビングのソファに座ったまま、ゼウスが言った言葉を思い出す。

「そついえば結局、玉座の部屋での爆発は何だったんだ？」

大方“試練”絡みの事なんだろう、と自己完結をしながら天使とやらの到着を待つ。

ゼウスによると、天使とは文字通り天の使いと言う事で、天界に異常が出るとその対処に回る者の事を指すらしい。ちなみに、天使とは必ずしも神の配下と言う事では無いとのこと。神と同等の地位に就く天使は『大天使』というらしく、強大な能力を持っているらしい。

閑話休題。

やがて天使が部屋に到着し、間もなく翔を転移させる。

移動した先の部屋には、もう既に全員が集まっていた。全員椅子に座っている。

現れた翔に、好奇の視線が突き刺さる。その視線を事も無げに無視しながら、足に車輪がついている椅子に座り、ゼウスに言葉をかける。

「……おいゼウス、さっさと自己紹介とやらを始める。この視線にはどうも慣れない」

話しかけられたゼウスは、笑みを顔に貼り付けながら、全員を見回す。

「ふむ、では早速始めようか。ではまず私から。分かっているとは思うが、私の名前はゼウス。ミドルネームは無い。一応最高神をやつてる。どうもよろしく、翔君？」

「……ああ、わかったわかった。良いから次を始めてくれ」

翔は面倒臭そうに手を振る。ゼウスは笑みを絶やさなのまま、

「はいはい。じゃあ右から順に簡単な自己紹介を頼む」

隣には、身長2メートルを超す大男がいた。そこそこ身長の高い翔でも、全く届きそうにない。

そして、大男は自己紹介を始める。

「初めてだな、白石……翔だっけか？俺はヘラクレスってんだ。よろしく！」

「……ああ、よろしく」

ヘラクレス、という名前にうん？　と思いつつも、翔はそれを微塵も出さずに返事を返す。

ヘラクレスは、そんな無愛想な返事にも人当たりのいい笑顔を向ける。

次は、何やらわざとらしい愛想笑いを浮かべる青年だった。

何がおかしいのか、ニコニコと笑顔を絶やさない。そして自己紹介を始める。

「初めまして、私はアポロンと申します。以後お見知りおきを、白石翔さん」

「アポロン、ね。こちらこそ宜しく」

翔は、直感的に悟る。こいつは絶対に信用してはいけない、と。何故ならすべてが胡散臭い。いや、胡散臭すぎる。笑みが、仕草が、存在全てが。

こいつとはあまり関わらないようにしよう、と翔は心に決める。

次は、優しいな雰囲気がかえる、妙齢の女性だった。その雰囲気とマッチした、優しいな笑みを浮かべながら、

「どうも、初めまして。私はヘラと申します。夫のゼウスが迷惑をかけたようで、申し訳ありません」

「……いえ、それほどでも」

ここにきて初めて優しい言葉をかけられた気がする。翔は少し感動した。

この際ヘラなんて名前は気にならなかった。気にしたく、なかった。

次は、どことなく見ていて不安になるような雰囲気纏う女性だった。外見だけだと、若く見える。

「は、初めまして、ヘスティアと申しますっ。ど、どうぞよろしく願います！」

「とりあえず落ち着け」

ヘスティア？ 聞いたことが有るような、無いような。そんなことを思いながらも、翔はヘスティアに落ち着けと呆れながらも指摘する。

どうやら逆効果だったようで、そういうとさらにオロオロし始めた。

天然だな、と翔は一瞬で失礼な判断をする。まあ事実だが。

次は、フードの付いたローブを目深にかぶり表情が窺えないせいで性別すらわからない何とも怪しい奴だった。

「……アルミテス」

「アルミテス……、か。俺は白石翔だ。……よろしく」

アルミテスから発せられた声は、高かった。だが、女性と断定できるほどでもなく、何処となく中性的な声質。男性か女性なのか悩んだ翔だったが、しばらくするとどうでもよくなった。

どうせこんな事をして深く関わる事はないだろうし、そのつも

りもない。そんな事を考えながら、手早く挨拶をすました。

そして最後の一人。

女性だった。美しいブロンドの髪を持ち、美人と言っても差し支えない整った顔をしている。特徴と言えばその他に気の強そうな鋭い目、といったところか。

だがそんなのは全く気にしなくなるぐらいに、ほかの神とは異なった所がある。

それは服装。神と言っても、何も漫画に出てくるような白い布ひとつだけ、などと言う事は無い。

むしろその逆。ほとんどの神は、人間が着ているような普通の服。人間です、と言われても違和感は全くない。

しかしこの女性は違う。

服の各部位に、鎧を切り抜いたようなパーツがくっ付いている。たとえば胸、手、腹部分など。

明らかにおかしい。が、この女性が身に着けることによって、さながら騎士のような風格が滲み出る。

その女性は、翔を視界に捉えたまま、

「……私はアテネ。聞いた事ぐらいはあるだろう、人間」

『人間』という言葉を強調しながら翔に言い放つ。

美しいその双眸は、翔に明確な敵意を以て睨みつけられていた。その激しい睨みつけを訝しげに思いながらも、取りあえず翔は言葉を返す。

「……そうか。俺は白石翔。どうも宜しく」

「名前など既に伝達済みだ、人間。それと貴様と馴れ合うつもりは微塵も無い。不要な言葉をかけるな」

何かしただろうか、と翔は思いだしてみる。しかし分かるはずもない。そもそもアテネと会ったのはこれで二度目、しかも最初はちらつと目を向けた程度だ。何かをする余裕もない。

翔が悩んでいると、ゼウスが再び全員に話しかける。

「さて、全員自己紹介は終わったみたいだね。ま、今日はこんな所か。顔合わせも済ませたことだし、もうお開きに」

「待ってください、父上」

しかしそれは冷徹な声によって中断させられる。
アテネだ。

翔の方を睨みつけながら訴えかける。

「本気でこの人間を天界に置くつもりですか」

「おいおい、話は聞いたろう？ それでもまだ納得できないのかい？」

「当然です！ 人間をここに置くなど、有り得ません！ 人間はおとなしく人間界で群れていればよいのです！」

突然声を荒げるアテネに、ゼウスはやれやれといった感じで首を

振る。

「だから、無理と言ったろう？ 翔君は試練の影響により特殊な能力を手に入れてしまった。そんな物が癒着した魂では、浄化など出来はしない。そしてそれは私たち神の責任だ。違ukai？」

その言葉に、アテネはすっと目を細めながら、

「ええ、それは間違っています。試練の流出は、唯の不運。

そして試練がその人間に落ちたのも、唯の不運。不運ならば致し方ありません。浄化が不可能ならば、魂を崩壊させてしまえば済む話でしょう」

その言葉に翔はピクリと眉を動かす。

「……何だ、それ、不運……？ 不運だと……！？ そんなモノで簡単に殺されてたまるかッ！」

「……ふん、私の知った事か。兎に角人間の天界入りには反対です。ここは神の場所、決して人間が土足で踏み入れていい場所ではありません」

それにゼウスは、

「うーん。難しいことになったなあ。確かに、アテネの言っていることも無視が出来ない事でもある。この天界には唯でさえ人間を見下している神が多い。とすると……、ああ、そうだ！」

翔は、途轍もない嫌な予感がした。言葉では表せない第六感的な何かが翔の脳内で思い切り警鐘を鳴らしている。

そして、それは見事的中する。

「決闘だよ！ 翔君とアテネが一騎打ち。アテネの実力は神の中でも指折りだ。翔君がアテネに勝てば、否定的な者も受け入れざるを得ないだろう！」

どうだ、名案だろう、といった感じのゼウスに翔は慌ててストツプをかける。

「ちょっと待て！ 今何といった！？ 神の中でも指折り！？ そんなのにただの人間が勝てるわけないだろう！」

翔の言葉に、ゼウスは笑いながら受け流し、

「大丈夫！ 君には試練の開放によって特殊な能力がある。それを上手く使えばもしかしたら勝てるかもしれない……という事も無きにしも非ず？」

いや、そんなこと聞かれても翔はどうも答える事は出来ない。

翔がボーゼンとしていて、アテネが話に加わる。

「……成程。確かにそうすれば結果が如何なったとしても納得のいく結末になる。私が負ければ天界の居場所を与える。しかし私が勝てば貴様は肉体を魂ごと磨り潰されここから居なくなる。良いだろう……」

いや良くない。翔は全力でノーと叫ぶが、あちらは全く聞く耳を持たない。周りの神はこれは面白いといった感じで興味深そうにその光景を傍観。どうやら止める気はサラサラ無い様子だ。

「 決闘だ！ 天界からは出て行って貰おう？ 」

何故こうなったのだろうか？

翔は自分に問いかけるが、答えは返ってこない。返ってくるはずもない。

そして始まる。

神話で名を馳せる神、アテナと。

度重なる不幸に辟易する人間、白石翔の尋常な決闘が。

この絶対的不利を、翔はどうやって乗り越えるのだろうか？

神さえも知らない混沌が、今始まる。

第七話 決闘？（後書き）

読んで下さり有難う御座います。

結局バトルには入れなかった、作者です。

恐らく次の次ぐらいにバトルは入ると思います。

前書きに書いたとおり、とても忙しいので何時更新できるかわかりません。

ですが暇を見つけてちょこちょこ書いていきたいと思うので、宜しくお願いします。

感想、誤字脱字の指摘、等々、作者は暇がある限りお待ちしております。

第八話 修練場（前書き）

今回短いです。なので、次回は出来るだけ早く更新したいと思います。

では第八話、どうぞ。

第八話 修練場

そこは、長い廊下だった。

灰色で、コンクリートに良く似た材質で床も壁も天井も作られている。

そこを、翔とゼウスは歩いていった。
そして翔が声を出す。

「おい！ 正気か！？ ゼウス！ 人間が神に勝てる訳が無いだろう！」

「十分に正気だよ、翔君。大丈夫、言っただろう？ “君には特殊な能力がある”、と」

「能力と言っても、試してみたが到底神に届くようなものじゃない！ それに未だ一つの能力はどんな物かすらも分からない。どうしろというんだ！？」

翔は必死にゼウスに訴えかける。
しかしゼウスは全く狼狽えずに、

「もう一つの能力は、まだわからないのだろう？ なら心配ない。きつとその能力は神さえも凌ぐ強大なモノだろうさ」

のんきに語るゼウスに、翔は真剣な表情で、

「……ゼウス。いい加減にしてくれ。人間は神なんて存在に勝てる

訳が無い。そんな子供でも分かる！ だから言っているんだ……、勝てる訳が無い、絶対に」

「勝てない、勝てない、ねえ……。なあ、翔君」

ゼウスは言葉を繰り返すと、翔に呼びかける。

「……何だ」

「この決闘っていうのはね、結局、避けて通れない事なのだよ。心苦しいことに、この天界には人間を下に見る神が多すぎる。だから、どこかでそんな輩を納得させる様なイベントが必須という訳なんだ、わか
るかい？」

「……………」

「この件についてはとても済まないと思っている。私も悩んだ。しかし最高神の私がいくら言っただとしても、反対の意見が消える事はないだろう。」

それら全てを納得させるためには、これが一番の方法なのだよ」

そしてゼウスは話すのをやめる。

それと入れ替わりの様に、翔が口を開く。

「……だが、どうする。勝たなくてはならない、それは分かるさ。だが実際特殊能力と言っても、それほど大層な物でもなかった。しかも内一つは何の能力かわからない。それとも、修行でもするか」

冗談で言った翔に、ゼウスは勢いよく頷いて、

「そう、修行だ、翔君。今ある能力を強化するために、未だ発現していない能力を使い物にするために。今私たちはそのための場所に向かっている」

「何……？　良いのか、そんな事をして。アテナとやらは確かお前の娘だろう？　娘の敵に肩入れなんて、出来るのか」

ゼウスは苦笑しながら、

「しょうがないだろう。戦うのが人間と神という時点で、結果は決まっているようなものだ。そして、君を殺させるわけにもいかない。ならば少しでも神と戦えるようにするのが私の役目だ。

お、やっと着いたよ」

廊下が途切れた場所に、ドアが一つある。
そのドアを開けると

「……スポーツ、ジム……？」

ドアの先の部屋は、とても広かった。
端から端までの距離が、兎に角長い。

翔が述べた感想は、まさにその通りだろう。
その部屋には、クロスバイクに始まり、ランニングマシン、マル

チジム、ダンベル等々、実に多種多様なスポーツ器具がずらつと並んでいる。

その他にも、ボクシングのリングや、サンドバッグ、ピッチングマシーンまである。

いうならば、色々なスポーツの要素を無理矢理詰め込んだ大規模なトレーニングルーム。かと言って特にごちゃごちゃとしている訳ではない。むしろかなり清潔そうに見える。

「まあ、そんな物だよ。私達は修練場、と呼んでいるがね。さて、ここに連れて来たのは他でもない、君のためだ。最早猶予は残されていない。期限は24時間。時間になったら君のもとに天使が現れる」

「ん？ ちよつと待てよ、期限が24時間？ 確かこの天界には決まった時間なんてないんじゃないのか」

「時間が無いと言っても、時間をはかれない訳じゃない。タイムウオッチを使えば済む話さ」

「……あ、そう」

それよりも、とゼウスは言葉を続ける。

「急がないといけない。この修練場にて、既存能力の強化、そして出来れば第三の能力の発現。もたもたしている暇はない。早急に準備をすまそう」

その言葉に、翔は溜息をつきながら、

「ああくそ……。やはりやるしかない、か……。死にたくも、

ないしな
」

そして天使が翔の前へ現れる。

翔の姿は、先程の服にジャケットを重ね着した服装。丈夫そうで動きやすそうな靴を履いている。

今いる場所は、マンションの一室のような部屋。ソファに座りながら頭に腕を回し、目を閉じている。

一見寝ているように見える翔に、天使が声をかける。

「翔様。指定の時間になりましたので、お迎えに上がりました。準備はよろしいですか？」

その言葉を聞き、翔はゆっくりと瞼を開けながら、

「ああ、転移してくれ……。……。全く、とても憂鬱だ」

そうばやいたと同時、部屋から翔と天使の姿が消えた。

翔は、未だ慣れない転移に疲れながらも、ゆっくりと足を前に進める。

そこは、何も存在しないところだった。

見渡す限り壁、壁、壁。入り口も出口も、何もない。

そこは円状の部屋だった。全体は広く、ドーム状になっている。この部屋もまた、コンクリートのような材質によって構築されていた。

そんな部屋に二つ、存在しているものが有った。

一つは言わずもがな、不幸な人間、白石翔。

そしてもう一つは、女神アテナ。

一つはただ無表情に、もう一つは激しく相手を睨みつけながら。やがてアテナが、口を開く。

「ふん、来たか、人間。逃げなかったようだな」

「……逃げてもどうせ、殺されそうなんですね」

翔は肩を竦めながらそう言う。

「そうだな。だが、それは逃げなくとも変わらない事だ」

アテナは、何処からか一振りの剣を取り出す。その剣には、刀身の両方に刃がついていた。見るからに鋭そうで、ギラギラと銀に輝いていた。

対する翔は、すでに手に何かを持っていた。それは、巨大な鞘に収められた、巨大な大剣。グリップを握りこみ、少し捻る。すると、鞘が剣からスライドするように落ち、刀身が露わになる。

煌びやかで美しい長剣と、武骨で鈍重大剣。

正反対の剣を持つ者たちは、ゆっくりと前へ進む。
そして。

ドーム状の部屋に、剣と剣がぶつかり合う、甲高い金属音が、響いた。

第八話 修練場（後書き）

次からはやつとバトルです！ 自信は全く存在していませんが、
上手く書けたらいいナ……。うん。

感想、誤字脱字の指摘などなど、お待ちしております。

第九話 被蹂躪 敗北（前書き）

どうも、作者です。

最近、朝家が出るのがとてもつらいです。

家から駅までの距離が長い……、長すぎる……！

まあそんなことはさておき、第九話です。

バトルです。

駄文です。

こんなのを投稿していいのかとガクブルしつつも、更新をしました。

では、どうぞ。

第九話 被蹂躪 敗北

動いたのは、同時だった。

同時に地面を蹴り、同時に剣を振りかぶり、同時に剣を振り下ろす。

火花が散り、双方とも剣が弾かれる。ただ、翔の方が大きく後ろに弾き返された。

剣を構えなおし、相手をしっかりと見据える。

「……ふん、それが試練の恩恵とやらか」

不意にアテナが独り言のように呟く。

「身の丈を超す大剣を軽々と振り回し、且つ素早い。その身体能力には正直驚いた。だが」

アテナは剣をゆつくりと構えながら、また喋り出す。

「そんな付け焼刃で、私をどうにか出来るとでも？」

嘲るようにそう言う。

その言葉と同時に、翔は無言で地面を蹴る。既に大剣はアテナに振り下ろされ、このままでは彼女の細い体躯は叩き潰されるだろう。

しかし、

「だから、なぜ勝てると思った？ 人間」

「ッ!？」

翔の剣はいとも簡単に弾かれる。

剣を横に弾かれた翔は、完全に無防備であった。勿論アテナがその隙を見逃すはずがない。間髪入れず二撃目を叩き込めた。なかった。

翔は横に弾かれた勢いを利用し、思いつ切り横に転がり込んだ。アテナの剣は、翔の頭の少し上で空を切る。

転んだ勢いを殺さないまま、アテナから距離をとる。

少し目の回った翔は、立ち上がりながら思案していく。即ち、勝つための戦略を。

だが、分らない。

翔の大剣での攻撃は、アテナの一振りによつていとも容易く撃沈する。

翔は、油断などしていなかった。アテナは神。甘くなど見れる訳が無かった。しかし、それでも翔はアテナの実力を見誤っていた。その細い体躯のどこから出せるのか、圧倒的なまでの贅力で捻じ伏せる。

翔は焦る、アテナの絶対的身体能力に。

（くそ、どうする……、こんな化け物にどう戦えというんだ……ッ！?）

しかしその思考は中断される。

アテナが、翔に突っ込んで行ったことで。

翔は、とっさに剣を盾にする事でそれを防御する。

剣と剣がぶつかり合う。後退していた翔はさらに後ろに飛ばされる。

「今さら考え事か、余裕だな。それとも、圧倒的な実力差に絶望し

たか」

まあ無理もないと、アテナが言葉を続ける。

「神と人間では地力が違いすぎる。勝とうと思つこと自体がおこがましいというものだ」

「……そんなの知つた事か、やってみない事には分からない……！」

剣のグリップを強く握り、そう言い放つ。

そう、勝たなくては死ぬ。文字通り命がけの勝負。負けるわけにはいかない、決して。

「は、ではやってみろ人間。結果は変わらんとするがな」

翔は再度地面を蹴る。片手で大剣を振り下ろし、そして弾かれる。一瞬だった。

そして間髪入れないアテナのカウンター。翔の肩から斜めに、袈裟がけで斬り下ろす。

だがそのカウンターはまたも空を切った。

翔が大剣を捨て、身をひねって避けたからだ。

だが、勝負の途中で武器を手放すなど愚の骨頂。アテナは、恐怖に駆られ武器を放したと、そう思った。

だがそれは違う。何故なら、

翔は決して、武器を失くしたわけではないのだから。

翔はアテナの攻撃を回避した瞬間、ジャケットの左袖に手を突っ込む。

袖にあるのは、一本のナイフ。刃渡りは短い。

グリップをつかみ、抜いた勢いのまま居合いの要領でアテナに切り付ける。

当たると思っていた。先ほどの大剣攻撃は全てこのための布石。このチャンスを活かすためだけに、わざわざ危険を冒し大剣を敢えて弾かれた。

完璧だと思っていた。しかし、その作戦は完全に打ち破られる。アテナを傷つけると思われていたナイフは

突然現れた白銀の盾によって、完璧に防がれる。

「なにッ!？」

翔は動揺の声を上げる。

どこから現れた？ どうやって虚空から生み出した？ そんな疑問が頭の中に回る前に、

剣が、銀の盾を突き破り翔に迫ってくる。

驚愕の声を上げる前に、アテナの攻撃によって吹き飛ばされる。そのまま向かい側の壁へと激突し、着弾点が激突の際に舞い上がった埃で見えなくなつた。

着弾地点を眺めながら、感心したようにアテナが呟く。

「ほう、反射的に手に持ったナイフで防御したか……。単なる本能によるとっさの行動。が、……なかなか喰らい付くじゃないか」

埃が舞う場所から、ガラガラと音が立つ。

やがて、その砂煙から翔がぬう、と姿を現す。

翔の姿は、見るも無残でボロボロだった。服は所々が破け、ジャケットの下から白いシャツが見える。

衝突の衝撃で切れたのか、頬からは血が滲んでいる。顔も服も、同様に埃まみれだった。

「ぐ、そ……」

絞り出すように何とか声を発しながら、よろよろと立ちあがる。

手に持っていたナイフは、先程の一撃を防いだせいで刀身は跡形もなく碎け散りグリップにも亀裂が入っている。翔は、使い物にならなくなった、今ではひび割れた柄のみしか残っていないナイフを床に投げ捨てた。

そして、思う。

（残りの隠しナイフの数は、合計五個。両足に二本ずつ、右腕に一本。……だが、もうあの作戦は使えない。このナイフらは本来、あの奇襲ののち追撃を仕掛けるためだったもの。なら……）

翔は、決断する。

両足首からバンドで留めてあった四本のナイフと、右袖のナイフを引き抜く。

そのうちの一本を見てアテナは、

「まだナイフを隠し持っていたのか。……ふむ、その短剣は『クリス』か。一体何処から持ってきた？」

クリス。

ジャワ語で、「刺す」、「貫通する」の意味を持つ短剣。

独特の非対称の短剣で、刀身は蛇のように曲がりくねっている。

クリスはその他に、特徴的なクランク状の柄を持っている。その柄は差し込むような打撃の補助として機能すると同時に、手首で刃に圧力をかける事が出来る、戦闘向きの凶悪な武器だ。

翔はアテナの質問に答えぬまま、短い刃渡りをしたナイフ二本を投擲する。

ダメージを期待しての行動ではない。そもそも、漫画ではよく投げナイフを攻撃方法にしている者がいるが、実際にナイフを投げて使う機会はほぼない。何故なら、ナイフは近づいて使った方が確実性があるし、最悪武器を鹵獲される場合がある。

つまり、これは罠。

投擲したダガーを叩き落としている間に、肉体を狙う

！

しかし。

その算段は、すでにアテナに見破られていた。

音も立てず現れた盾に、アテナは一言、

「蹴散らせ」

次の瞬間。

盾が巨大化する。

ただし変化はそれだけでは終わらない。

巨大化した盾はその形をキープし、

翔に、投擲された二本のナイフ諸共、目にも止まらない速度で激突する。

「ぐ、が　ッ!？」

翔は盾に壮大に腹から激突した。

金属と肉がぶつかり合う、嫌な音がする。為す術も無く、翔はその場に崩れ落ちた。

翔の口から、ごぼつ、と血が吐き出される。

かろうじて意識を残しながら吐血する翔に、アテナは見下すように語りかける。

「どうした、人間。まさか盾が飛んでくるとは思わなかったか？」

誰が盾は防御にしか使えないものと決めた。つまりは、こんな攻撃方法もあると言う事。……たったそれだけだろうか？」

膝を折り、身を低く構えながら、翔は静かに焦る。

(……どうする……)

残り武器はナイフ三本。

こちらの攻撃は全て防がれ、直後カウンターが襲い掛かる。それだけならまだしも、アテナの盾は、飛ぶ。

到底避けることは出来ない速さで。

体はあちこちが痛みを發し、立ち上がるのにも激痛が伴う。この状態で、一体いつまでもつのだろうか。

（どうする……ッ！？）

その時翔は、完全に勝利手段を失った。

ドーム状の部屋は、灰色の粉塵が舞いに舞っていた。
目を凝らしても、全く先が見えない。いや、よく見ると、床は所々が抉れ、小さいくぼみがいくつもあいている。
そんな惨状の中、アテナが剣を構えながら、ただ前方に視線を向けている。

やがて、粉塵による霧が晴れる。

アテナの先には、いくつもの盾が重なり合い、うずたかく積みあがっているという異様な光景があった。

アテナはそれを見たまま、視線を外さない。

しばらくして、盾の山から音が発せられる。

山が少しぐらつき、一番上にあつた盾が山頂から滑り床に盛大な音を立てながら落ちた。

そして突然、盾の山の下部から人の上半身が現れる。

翔だった。

頭からは血が滴り、服に隠されていない手からは痛々しい痣がいくつも確認できる。

それを見てアテナは、

「……まだ生きているのか。能力持ちと言っても、只の人間が耐えられるとは思わなかったな」

翔はその言葉を見無視し　いや、もう聴覚さえも機能していないのかもしれない。

そう思わせるほど、翔は満身創痍であった。
無言で盾の山から抜け出し、膝に手をかけてゆっくりと立ち上がる。

立ち上がる間も、翔の身体からは血がさらに噴出した。冷たい床には、血が点々とついている。

「……無様極まりない、な。どうせ立ち上がった所で勝てはせん。潔く諦めろ」

そう言いながら、アテナは自分の前方に盾を一つ、出現させる。

もう翔に何かを避ける体力は残っていない。何かを避ける事が出来る体では、最早無い。

そう確信しながら、アテナは盾に命令を下す。

そして、盾は発進する。

翔を吹き飛ばすために。

これで翔は確実に意識を刈り取られる。いや、最悪死ぬかもしれないが、アテナとしてはそちらの方が好都合。遠慮容赦なく盾は翔に突撃する。

見るまでもない。これで翔は吹き飛ばされ、負けるだろう。

そして魂を肉体ごと抹消される。白石翔という人間は、存在しなかったことになる。

盾は翔の目前に迫る。そして

盾は、翔に当たらなかった。

耳をつんざく金属音のような音が部屋に響く。

盾は、翔を覆う透明の障壁のようなものに防がれる。

まるで丸みを帯びた何かにぶち当たるように、後ろへと受け流されていく。

盾は翔の後方の壁に激突し、やがてその動きを停止した。

信じられないものを見たかのように、アテナは驚愕を顔に出す。

「な　、なにがあつた！？　有り得ない、これを防がれるなんて……ッ？」

アテナの狼狽える声に、やはり翔は何も返さない。
やがて、翔自身に変化が訪れる。

それは、髪。

頭頂部から毛先へかけて、ゆつくりと染まっていく。

白髪だった。光り輝く銀ではなく、ただただ白に染まっていった。純白ではない。むしろ、周りになにか汚い印象を与える。

例えるなら、大量の白色の絵の具を使い、力任せに思いつ切り塗りたくったかのような　、
そんな、粗暴な色だった。

「貴様、何をした……！？　貴様の能力に防御能力など存在しなかったはずだ！」

噛みつくようにそう叫んだあと、ハッ、と何かに気付いたような顔を作る。

「……それが、第三の能力だというのか……。だが、あれは詳細不明で扱えなかったはずだ……。まさかこの土壇場で能力が発現したというのか!？」

翔は、無言で前に足を進める。

「ぐ……、くそ!」

大量の盾を自身の前に展開し、それを翔めがけて一斉に射出する。

だが、当たらない。

先ほどと同様に、全ての盾は後方へと受け流され、翔に傷つけることはない。

翔が前進する。アテナへと向かって、ゆっくりと。

さっきまで一方的に痛めつける側だった自分が、いつの間にか命の危機に瀕している。

その事実をアテナは即座に否定するが、それは無様な強がりだと自分の脳が冷静に告げていた。

有り得ない。

神が負けるなど。

人間に。神よりも遥かに劣るはずの劣等種に。

ましてや、神話で絶対的な知名度を誇る自分が。

神話での知名度が高いという事は、それだけ天界にいるその神の存在が強大である事と同義。

女神アテナ。

宗教に全く精通していない人間でも、一度は耳にしたことが有るであろう、

いうなら“偉神”。

そんな自分が、たった一人の人間に怯え、震え縮こまっている。脳が必死に鳴らす警鐘を押さえつけるように、闇雲に、がむしゃらに無駄な抵抗を続ける。

だが、当たらない。

アテナの必死な抵抗は、決して翔には届かない。

翔はふらふらと、おぼつかない足取りで、しかし確かに前方を目指し進んでいく。

アテナは、その姿が恐ろしくて。

悪魔よりも悍ましい、正体不明の人間ではない何かに思えてきて。

「く、来るな……。やめろ、来るな……。ッ？」

そんな情けない泣き言を、口にした。

しかし翔は止まらない。

まるでそれがアテナの寿命であるかのように、ゆっくりとアテナとの距離を縮めていく。

そして、翔はアテナの目の前にたどり着いた。

先ほどまでの抵抗は止み、力なく一步後退した。全身が震えに震え、もう何も動かせない。

翔は黙ったまま、静かに拳を握る。

そして、振りがぶる。

構えなど、無かった。

唯目の前の敵を殴り飛ばすことしか、翔の頭にはなかった。

殴った。アッパー気味の拳を、鎧のパーツがくっ付いた腹に叩き込んだ。

へろへろで、威力も何も無さそうな拳に、しかしアテナの細い体軀はボールの様に吹き飛ばされる。

拳と鎧がぶつかり合う、凄まじい音が響く。理解不能の力が、拳に加わったのを翔は感じた。

ついさっきの翔のように、アテナが壁に激突する。

しかし、その衝撃は先ほどの比ではなかった。その振動は部屋全体を揺らし、翔自身も少しぐらつく。

しかし、倒れない。

今にも崩れ落そうなボロボロの身体を、必死に奮い立たせ二本の足でしっかりと立つ。

そして、呟いた。

「勝ちだ……勝ったんだ……。……ざまあ見ろよ、神。みたかよ、天界……。」

俺の、勝ちだ」

ビーツ、と。

ドーム状の部屋に、軽い電子音が響く。

そして、いつぞやの玉座の部屋の時と同じ感情の籠っていない機械音声が喋り出す。

『 勝者、白石翔。勝者、白石翔。間もなく転移を開始いたします。繰り返します、勝者、白石 』

そして決闘は、終わった。

翔は最後まで、拳を握り、立ち続けていた。

第九話 被蹂躪 敗北（後書き）

ここまで読んでいただき、誠にありがとうございます。

相変わらずな文章ですが、面白いと感じていただけたら幸いです。
正直、戦闘描写に自信は全くありません。書いてる途中で訳分かんなくなりました。

それでは、こちら辺で後書きを終えつつ……、

え、次回の内容？

……、どうなるんでしょうねえ……。

感想、誤字脱字の指摘等々、作者は随時お待ちしております。

第十話 その後（前書き）

何だか遅くなっちゃいました、作者です。
今回は決闘その後、的な話です。
では、どうぞ。

第十話 その後

決闘は翔の勝利によって幕を閉じた。

女神アテナが一介の人間によって下されたという事実は、それはそれは大いに天界を揺るがした訳だが……。

人間の天界入りの反対派も、納得せざるを得なくなり……。
取りあえずは大人しくなり、落ち着いている。今のところは……
…今のところは。

さて、その元凶ともいえる人間、白石翔が今何をしているかというところ、

爆睡していた。

天界には時間という概念がないということで、惰眠を貪りまくっている。

まあ無理もないだろう。

十数時間前までは、神と死闘を繰り広げていたのだ。むしろ生きているだけでも奇跡だと言える。

そこはゼウスが翔に与えたマンションの一室のような部屋で、出口という物は存在しない。

そこから出るためには、天使を呼び出し転移を頼むしか方法はない。

まあそんなこんなでアテナとの決闘を終え、満身創痍になったわけだが、

「……様、起き………さい」

翔の傷は、殆んど完治済みだったりする。

何やら天界の得体のしれない技術により、重症の身体からすぐに健康体に戻ったのだ。

「白石様、起きて下さい」

その“技術”がまた信じられないもので、怪しげな呪文を呟いたかと思うと、瞬く間に傷が回復した。

翔としてはそんな胡散臭い物を使用して欲しくはなかったのだが、このまま傷が完治するまでじっとしているのも嫌だったので、半ば嫌々ながらも治してもらったわけだ。

まあそれは置いておくとして。

今この部屋には翔しか居ないはずだ。

なら先ほどから翔を起こそうとする声の主は一体誰？

天使？ いやいやそれは無い。

翔は朝起こしてくれなんて事を頼んだ記憶はないし、天使は何も頼んでないのにわざわざ部屋に出向いてくることもない。

では誰？

寝惚けていて先ほどまで深く思考が出来なかった翔だが、やっと意識がはつきりしてきたようでのそりと身を起こす。

すると目の前にいたのは、

「あ……？ アテナあ！？」

「お早うございます、白石様」

満面の笑みを顔に浮かべた、女神アテナがいた。

(……あれ、俺何かしたっけ)

先ほどまで殺し合っていた相手による笑顔に、寒気しか感じなかった翔だが、ふとこの部屋に戻った数時間前の事を思い出す。

そう、あの時は確か、

そこは、学校の保健室の様な所だった。
複数のベッドが綺麗に配置されており、白いカーテンにより一つ一つ仕切れるようになっていた。

そんな部屋のベッドに、寝ている者がいた。
アテナだった。

外傷は見当たらず、安定した呼吸音が窺える。いつもの鎧の格好ではなく、薄い色をした普通の服を着ていた。

やがて、少し呻き声を上げたかと思うと、ゆっくりと瞼を開ける。

「……ここは？」

むくりと上体を起こし、辺りを見回す。それと同時に、何かに気付いたような顔を作る。

「……私は負けた、のか……」

いつもの彼女からは想像できない、無気力な言葉が口から出る。

それほどまでに、人間に負けたという事実はショックだったのだろう。

まさか自分が人間に負けるなど、夢にも思わなかったに違いない。

涙を流すでも、怨嗟の声を口に出すでもなく、唯々呆然としていた。

アテナ自身も、これからどうしていいか分からなかった。

しばしそのまましていると、突然カーテンが開く。
そこから現れたのは

「何だ、起きていたか」

「お前、は……」

翔だった。

腕には、決闘に使用していた大剣を鞘に入った状態で持っている。翔は重そうにそれをベッドに立てかけた。

少し驚いた顔を見ると、すぐに自嘲気味の笑みを浮かべた。

「は？、私を、笑いに來たか。それとも、罵りに來たか」

自暴自棄になったかのようなアテナに、最早神の威厳など消え去っていた。

あるのはただ、生きるのに疲れたかのような空っぽな笑み。

翔は少し黙った後、

「そうだな……。強いて言うなら、同情しに來た」

特に何の感情をのせるでもなく、機械的にそういった。

「何、だと……？ 同情！？ 同情だと！？ ふざけるな！ 同情など必要ない、さっさと失せろ！」

今にも飛び掛かりそうなアテナを、翔は無表情に見据える。

そして一言、

「……可哀想な奴だ。今まで挫折という言葉を知らなかったのか……。
……可哀想な奴だ」

「ッ？」

その言葉に、アテナは言葉を詰まらす。

そう。

アテナに、『敗北』という言葉は無かった。

これまで何不自由なく暮らし、何不自由なく勝ってきた。それが常識だった。そして周りも、そう思っていた。

だが負けた。

自分は、はるか格下の人間という存在によってその常識を木端微塵に砕かれた。

追い討ちをかけるように、翔は言葉を続ける。

「その高いプライドに見合うような実力を持っていたからこそ、これまで『挫折』という物を知らなかった。……哀れだな。目も当てられない」

「黙れ……」

「自分が負けるなど、有り得ないと思っていたのか？ だが負けたな。格上でも、同等の実力を持つ者でもなく、格下の存在に」

「黙れッ？」

アテナは、翔の胸倉をつかみ、激しい形相で睨みつける。

そんなアテナに、いつもと変わらないぬ無愛想な顔を向けながら、

「……どうした。殴るのなら好きにすればいい、勝手にしろ。
だが、殴ったところで如何にもならないのは、お前が一番解っている事だろうが」

「……ッ！　ぐ……くそ……」

アテナは何か言いたそうにした後、力なく胸倉から手を放す。
翔はそれを見下ろしながら、微塵も表情を変えない。
視線を下げ、うつむきながらアテナは言葉を発する。

「わからないん、だ……。もう何も……。何も考えたくないんだ……。
。頭の中が混乱して、何をしたらいいのか分からない……。どうしたらいいんだ……。どうしたらいいんだ……。！」

震える声でそう呟いた。

たった一度の敗北。

ただそれだけのことが、たかがそれだけのことが、彼女にはとても受け入れがたい現実なのだ。

翔には分からない。

なんでこんなにアテナが苦しんでいるのか。
苦痛しかなかった人生を歩んできた彼にとって、なぜこんな下らない事で死ぬほど落ち込むのか、まるで分らない。

ただ。

翔は少し黙ってから、

「別に、何もなくていいだろうが」

「……、え……？」

彼女にしては珍しい、ポカンとした表情を作る。

翔は、眠たそうに欠伸を一つしながら

「神なんだ、人間の指図なんて受けるなよ。それに俺に尋ねられても困る。俺に神を導けるような度胸なんてないよ、好きにしろ、俺は知らん。別に今までどおりに過ごせばいいじゃないか、挫折ぐらい神だつてするさ、きつと」

翔は少し間を置き、

「誇りなんか微塵も持ち合わせていない俺には、所詮プライドの高いお前のことなど、到底理解できん。ただ、何時までもそうやって落ち込んだままだと見苦しいにも程がある。俺が元凶みたいで折角勝ったのに後味が悪いじゃないか、何とかしろ」

自分勝手なことばかり述べた後、大剣を掴み、それじゃ、と立ち去ろうとする。

それをアテナは慌てて引き留める。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ それだけなのか！？」

カーテンに手を掛けようとしていた翔は少し振り返って

「それだけ、って……。他に何か？」

アテナは、少し複雑そうな顔を作り、

「い、いや……。私は、お前を殺す気でいた。殺しても構わない矮小な存在と思っていた。そして恐らく、今も。なのに何故？ 何故何も言わないし、何もしない……？」

訳が分からないといった感じで、翔に質問する。

翔は、虚空を見て少し考えながら、

「それなら、俺も同じだ。お前を殺す気でいた。気に入らない性格をした奴だと思っていた。けど結局は、どちらも生きている」

到底無邪気な笑顔とは言えない、皮肉めいた笑みを浮かべながら、

「ならもうこれでいいじゃないか。結果的にどちらも死なずにすんだ。これにて一件落着、そうだろう？」

翔はそういった後、大剣を引きずりながらカーテンの向こう側に消えていった。

眠いなあ、と見えない誰かに愚痴りながら。

「……………」

アテナは、体を少しベッドから浮き上がらせた状態のまま、しばらく茫然としていた。

そして茫然とした感じでポスン、とベッドに体を埋める。

「……………」

アテナは天井を見つめたまま、硬直する。
そして、呟いた。

「好きにしろ……、か」

そう言った後、静かに、誰にも気づかれないように、笑みを浮かべた。

「で、一体何の用だ」

翔は朝食を手早く済ました後、リビングのソファでアテナと向かい合っていた。

尋ねられたアテナは少しキョトンとしながら、

「何の用……とは？」

「俺が聞いているんだよ！ 大体お前人間天界入り反対派筆頭だろ！ キャラ変わってねえか！？」

翔が疑問点をぶちまけると、アテナはニコニコと笑顔を保ちながら、

「そんなの、決まっています」

「……はあ？」

「白石様は、私に“好きにしろ”といました」

「あ……？ ……ああ、確かに言ったかもしれないけど」

それが何だ、といった感じの翔に、アテナは大きく胸を張り、

「それがこの結果です」

「いやなんでそうなるかわかんない全然」

翔があきれ返りながらそう返す。

「はー……。確かに好きにしろとは言ったかもしれないが、それが何故こうなる？ 全く持って意味不明だ。理解不能だ」

「……私は確かに、人間を見下していました。ですが！」

「うおっ……」

翔はアテナの急激なテンションの変化に驚きながらも、次の言葉を促す。

「……ですが？」

「神だつて人間に負けるという事実には、人間が神よりも素晴らしい思考を持っていることに、気付いたんです。白石様は、負けた私にこう言いました。“好きにしろ”、と。ですから、私はその言葉に従い白石様に仕える事にしたのです」

「……………」

翔は少しの間硬直した後、

「……お前、何か悪いもんでも食べた？」

「……？ いいえ、私はすごぶる健康ですよ？」

翔はこの有り得ない現実には頭を抱える。

（おかしい。その理屈はおかしい！ 意味が全く分からんぞ！ ついさっきまで殺し合ってたのに、一体どんな心境の変化が……）

黙ったままの翔に、アテナが少し不安そうにする。

「あの……、駄目、でしょうか……」

「……あ？」

アテナは少し顔を伏せながら、

「そう……、ですね。ついさっきまで敵対していたというのに今さら仕えるだなんて……。虫が良すぎますよね」

「……………」

翔はアテナをじっと見た後、大きなため息を吐き、頭をガシガシと掻く。

「……本当に滅茶苦茶だよ、ここに来てから。少しは気の休まる時間はないもんかね」

翔はソファからすつくと立ち上がり、背を向ける。

「あ……」

アテナは見捨てられたような表情を作り、悲しげな声を出す。
翔は幾つもあるドアの一つで、ぴたりと止まった。

「……おい、何をしている。さつさと来い、ゼウスに用があるんだ。
お前も神なんだから、転移ぐらいは出来るだろ？」

「え……」

その綺麗な瞳を目一杯見開いた後、アテナは心底嬉しそうな声で、

「はい！ 御安いご用です！」

アテナがこちらに駆け寄ってくるのを見ながら、翔は再度ため息
を吐く。

（……ああ、面倒なことになりそうだ……。そもそも何でこんな事
になった？）

翔は少し考えた後、

（ ま、どうでもいいか）

放り投げた。

「あー……」

先ほどのマンションの一室の様な部屋とは打って変わって高級そうな家具が適当に配置された書斎めいた部屋。
ゼウスの部屋だ。

転移に軽い眩暈を感じながら、高そうな机に置かれた呼び鈴を鳴らす。

そこまで大きくもない金属音に反応するかのように、一瞬でゼウスが現れた。

「おや、誰かと思ったら翔君じゃあないか」

ゼウスは人当たり良さげな笑顔を浮かべ、

「まずは勝利おめでとう！ 君ならやってくれると信じていた！」

ぐっ、と親指を立てるゼウスを翔は鬱陶しそうにしながら、

「何が信じていただ。意味のない修行をやらせやがって。全く決闘に通用しなかったんだが」

「いやあ、やはり娘の敵を応援するのは気が引けてね。ハハハ」

「いい性格していやがるぜこの野郎……！」

身も蓋もないゼウスの発言に、翔は青筋を立たせるが当の本人は『勝ったからいいじゃないか』と笑いながら受け流す。

「それにしても最後はすごかったよねえ。何だいあれは？ 自動防御能力かい？ まさか三つ目の能力があんなにデタラメだとは思わなかったよ」

それで何だったんだい？ と子供の様に質問してくるゼウスに翔は、

「さあ？」

「……………え？」

ポカンとした感じでゼウスが聞き返す。

翔は革製の黒のソファに座りながら面倒くさそうに、

「分からん。ただある瞬間ふっと何かが思い浮かんで、いつの間にか自在に扱えるようになっていた。能力名が何かは分からないし、どついう原理なのかも分からん。俺にはさっぱりだ」

「ふむ…………」

ゼウスは顎に手を当て考える素振りを見せると、

「何なんだろうね……。天術でも、魔術でもない何か、か」

「……“魔術”？ 何だそれ、天術と何が違うんだ？」

聞き慣れない言葉を不思議に思った翔に、ああ、と思いだしたように

「前、天界や人間界のほかに、『冥界』というものもある、と言ったろう？ 違いはほら、術を扱う術者かな。天界にいる者が扱うのが、天術。冥界にいる者が扱うのが、魔術」

まあでも、とゼウスが言葉を続ける。

「実際殆んど変わらないんだけどね……。って言うとなんか奴らが出てくるのさ、これが。天界と冥界は争いこそしていないけれど、仲があまり良くなくてね。まあ冥界のトップ、……。ああ、これは私の兄なのだけれどね。……。別に兄と仲が悪い、って訳じゃあないんだけど……」

翔はその言葉に納得した、という感じで、

「つまり下の方が互いにいがみ合っていると言う事だろ？ だが、原因は？」

「冥界って言うと、何となく負のイメージが強いからねえ……。実際に死者の魂とか取り扱ってるし。自分達とまるつきり反対の位置にいる奴らは生理的に受け付けられないんだろうさ」

「そんなものなのか……」

複雑だな、と感想を残した翔に、ゼウスは苦笑しながら

「まあ、そんなに深刻な問題でもないさ。いうなら子供が喧嘩し合っている様な物だからね。天界と冥界で全面戦争、なんてことは起きないだろう。……そうそうところで、何やら愉快なことが起こっているようじゃないか」

ニヤニヤとウザったらしく笑みを浮かべるゼウス。

翔はその不愉快な顔面をぶん殴ってやろうかと思ったが、すんでの所だと思いとどまる。

「……愉快？ 何かあったか？」

「いやあ、惚けなくていいんだよ翔君。アテナが君の部屋に出向いて行ったっていうのはもう把握済だ。それでそれで？ 一体何があったんだい！？ ぐむっ」

鼻息荒く顔を身体ごと乗り出してきたゼウスを手で押しのけながら、

「うるさい黙れ。別に何もしていない。少なくともお前が思っている様な事はな」

「む、何だいつまらん。あの堅物娘にもようやく春が来たかと思っただけだね？」

「ああそう……、まあ確かに貰い手が見つかりそうも無いな、あの

ままじゃ
」

「そうなんだよ……、困ったもんだろう？ だから君が貰ってくれ
ると非常に助かるんだけどね？」

「断る。父親のくせに娘を気軽に差し出すな阿呆」

こんなのが親でよくまともなのが生まれたな、と思う。

(……いや、マトモともいえないか)

翔が重苦しいため息を吐くのを傍目に、ゼウスが言葉をかける。

「何だい。じゃあアテナは君の部屋に襲撃でもかけたのかい？」

「……ある意味襲撃よりも衝撃的だったよ……」

翔が少し頭を抱えるが、ゼウスは一体何のことだというような顔
をしている。

まさかゼウスも“あの”アテナが『人間に仕える』発言をしたな
ど、露ほども知らないだろう。

「……ま、でも」

「うん？」

「そんなに悪い気分じゃない。
の事だしな」

誰かに懐かれるなんて、初めて

「……何でまだここに居る」

「それは勿論、白石様のお帰りをお待ちしていたからです」

翔は自分の部屋に戻っていた。

すると待ち構えていたのはアテナ。何故か床に正座している。

「従者が主人の世話をするのは当たり前です！ 起床や食事、洗濯は勿論……、その、もし白石様が望むなら、ご入浴や添い寝なども喜んで……いえ、謹んでお受け致します！」

「出てけ」

やはり襲撃の方がマシだった、と改めて思う翔だった。

第十話 その後（後書き）

最近ベッドから出るのが辛いです。

家には床暖房などなく、しかもエアコンがぶっ壊れています。
エアコンなしでどうやってこの冬をしのぎ切るんだ……！？

まあ家では冬も半袖姿の私が言う事では無いような気がします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3965v/>

とある世界の“拒絶者” The denialer

2011年11月23日13時53分発行